

にちぎん

2024 NO.78

夏



インタビュー 扉を開く

片山真理 アーティスト

時空を超える「アート」の力を信じて

地域の底力

鹿児島県肝属郡肝付町

行政の先駆的な試みが多様な可能性を生む鹿児島県肝付町

対談 守・破・創

高橋裕子 津田塾大学学長

内田真一 日本銀行副総裁

津田梅子の生涯とその志を継ぐ女性リーダーが変える社会

エッセイ “おかね”を語る

渋澤 健 実業家 新一万円札の渋沢栄一は暗いところが嫌い？

七月から新一万円札の図柄となる渋沢栄一。およそ五〇〇社の会社の設立、六〇〇の社会的事業の設立に関与した「日本の資本主義の父」が蘇り、自分が肖像となっている新一万円札を見たら、何を言うでしょうか。

恐らく、声を荒げるでしょう。「ワシは暗いところが嫌いじゃ！」と。

暗いところとはタンスの中。つまり栄一は「タンスの中に入れっぱなしにしないでくれ」と切に訴えると思います。というのも、いまの日本にはタンス預金の額が約五九兆円あるといわれているからです。手元に置くタンス預金は自分の利便性や安心のためのお金です。

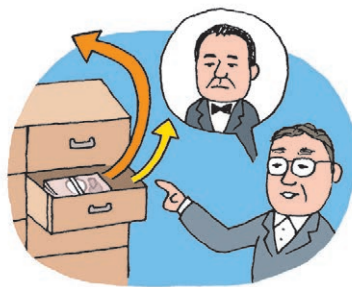
一方、銀行に預けている紙幣や貨幣は、貸し出しなどへと通じて社会に循環しています。つまり、誰かの役に立っています。一方、タンス預金とは自分以外に誰にも役に立っていないお金です。しかし、五九兆円という数字を聞いてもピンとこないかもしれません。

では、五九兆円を一万円札で積み重ねていくと、どのくらいの高さになるか想像してみましよう。

一〇〇万円の一万円札の束の厚さは約一センチです。ということは一千万円の束は一〇センチになります。では一億円が一メートル、一〇億円が一〇メートル、一〇〇億円が一〇〇メートル、一千億円の高さが一キロメートルです。一兆円が一〇キロでエベレスト山よりも高

新一万円札の渋沢栄一は暗いところが嫌い？

渋澤 健



絵・江口修平

く、飛行機の飛行高度ぐらいです。ということは、五九兆円の一万円束の高さは五九〇キロ、つまり宇宙に届きます。

よく「日本には資源がない」といわれます。決してそんなことはありません。日本には、ただタンスの中で眠っているだけでもお金という資源が五九兆円もあるのです。銀行口座等に収めている日本の家計の現預金を全て合わせると一〇〇兆円以上です。日本はかなりのお金持ち大国なのです。

そういう意味では、日本人は理財に長じる国民と言えるのか。渋沢栄一は、否と考えていたようです。

「真に理財に長じる人は、よく集むると同時によく散ずるようなくてはならぬ」(出所:『論語と算盤』)

「よく集める」ことには長けているように見える日本人ですが、「よく散ずる」には課題がありそうです。

「世代を超える長期投資」を日本社会へ提案したいという想いで、二〇〇八年に仲間たちと共に一般個人向けの資産運用会社を設立した身として、こども向けの「お金の使い方」セミナーを通じて学びの場を設けています。お金とは自分のための消費や貯金というMEの使い方だけでなく、社会の価値を促す寄付や投資というWEのお金の使い方があることを。大人たちにも学んでほしい本質です。



しibusawa・けん●実業家。2001年にシブサワ・アンド・カンパニー株式会社を設立。07年に株式会社コモンズ(現・コモンズ投信株式会社)を設立。岸田内閣の「新しい資本主義実現会議」構成員、金融庁の「サステナブルファイナンス有識者会議」委員など複数の政府系委員会に所属。インパクトコンソーシアム副会長、東京大学総長室アドバイザー、等。渋沢栄一の玄孫。



- 2 エッセイ／“おかね”を語る
新一万円札の渋沢栄一は暗いところが嫌い？ 実業家 渋澤 健



- 4 インタビュー／扉を開く
片山真理 アーティスト
時空を超える「アート」の力を信じて

- 9 地域の底力——鹿児島県肝属郡肝付町
行政の先駆的な試みが多様な可能性を生む
鹿児島県肝付町



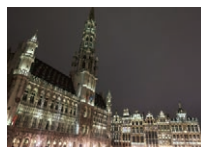
- 16 対談／守・破・創
高橋裕子 津田塾大学学長
内田眞一 日本銀行副総裁
津田梅子の生涯とその志を継ぐ女性リーダーが変える社会

- 20 FOCUS → BOJ 46 改刷に向けた日本銀行の取り組み
新しい日本銀行券の発行に向けて

日本銀行のレポートから

- 24 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2024年4月—

- 26 「金融システムレポート」—2024年4月—



- 32 トピックス
新千円券肖像・北里柴三郎の出身地からのレポート(熊本支店) ほか

- 35 AIR MAIL from Brussels
複雑な小国・ベルギー

表紙のことは

日本銀行高松支店は、第二次世界大戦中の昭和十七年（一九四二）二月に、二一番目の支店として開設されました。

四国には既に松山支店がありましたが、戦火の下でも四国島内への現金供給を円滑に行う必要性などから、高松支店が設置されました。

表紙の店舗は、開設当初の店舗です。旧高松城主子息・松平頼寿氏所有で、市の公会堂「讃岐会館」として使用されていた木造二階建ての建物を改装して店舗としましたが、昭和二十年（一九四五）七月の空襲により金庫を除き全焼しました。一日たりとも現金供給に空白を生じさせないため、店舗焼失の翌営業日には、百十四銀行本店を間借りして営業を再開しました。

その翌月、二代目店舗として旧高松信用組合の建物を受け継ぎ、その後、昭和五十五年（一九八〇）には、現在の三代目店舗（高松市寿町）に移転しました。二代目店舗の跡地は、現在、高松市美術館として市民の憩いの場となっています。高松支店は、これからも地域の皆さまとともに歩んでいきます。

裏表紙の写真は、金融研究所アーカイブ所蔵のものです。



表紙・画 北村公司

片山真理

アーティスト

KATAYAMA Mari

自らの義足と身体を模した作品で多面的な世界観を創造し、国際的評価を受けるアーティストの片山真理さん。先天性の疾患のため九歳のときに両脚を切断し義足を使うことになったが、幼い頃は学校になじめず、学生時代には就職活動をも仕事が見つからなかったという。しかし、国境も世代も時空も超えるアートの力が片山さんの生きづらさを解きほぐし、進むべき道を照らし出した。そのターニングポイントの数々を、魅力的なエピソードと共に語っていただいた。



時空を超える「アートの力」を信じて

みんなと仲良くなりたくて

自ら選択した両脚の切断手術

——九歳のときに障がいがあった両脚を切断され、義足を使い始めたそうですね。

片山 幼い頃は両脚に補装具をつけていました。同級生から「真理ちゃんはこのができないから一緒に遊べないね」と言われるのが悔しかった。みんなと一緒に遊びたい、同じ靴で私も歩きたいと思っていました。

それで、九歳のとき、義足にしたらみんなと同じ靴が履けるからという理由で両脚を切つたらしいんですけれども……。自分が決断したこと忘れぬぐらい、脚を切る選択は私にとって重要じゃなかったんです。これとこれを貼り合わせたいから糊のりが必要というのと同じで、脚を切ることは自分の目的を達成するための手段の一つ。その選択は自然なもの

だったと思います。

——義足で歩けるようになるまでには大変な努力が必要ですね。

片山 漫画『ブラック・ジャック』のピノコが地べたを這いずり回りながら歩いたシーンを見た時に、「あつ、これは私だ」と思ったくらい努力をしました。手術から半年足らずで、義足で歩いて学校に戻りましたが、残念ながら、みんなと仲良くはなれなかった。見た目だけでは駄目だったんですね。

でもみんなと遊ぶ時間が少なかった代わりに、自分の得意なものとか好きなものに向き合う時間が多かったです。絵を描くこと、何かを作ること、歌うこと、本を読むこと……今やっていることと変わりません。

——アーティストになるベースがそ

の頃に培われたんですね。

片山 私だけでなく家族全員、作ることが大好き。母も祖母も曾祖母もお裁縫好きで、毎日ミシンや編み機はりの音が鳴り響いているような家でした。おじいちゃんの水墨画を描いたり、俳句や映画も大好き。週末になると、地元的美術館によく連れていってくれて、そこで一日中、私は飽きずに過ごしていました。絵の前に立つと、ずっと昔にこの絵を描いた画家も、今の私と同じ場所に立っていたんだと感じられる。このブラッシュストロークす（筆跡）はそのときのものだ。そういうことが私の中にジーンと染みて、凄く嬉しかったんですね。

一千万円で作品が初めて売れたとき

アーティストの自覚が芽生えた

——その頃からアート作品を作ることを意識していたのでしょうか。

片山 いえ、身近なもののすぎて、母のお裁縫もおじいちゃんの水墨画も、自分の絵や詩もアートではないと。アートは特別なものであって、私たちがやっていることは趣味や生活の延長。アートをやっているという自覚はなかったです。美術館で出会ったのはマリー・ローランサンとか山口薫とか、名のある芸術家の作品ばかり。私は、何かを作ることが息をするように好きだったけれど、プロの芸術家とはやっていることが違うと線引きしていましたし、この先職業になるとは想像もしていませんでした。

——高校三年生のとき、公募展での

受賞が、アートの世界への入り口に

なったそうですね。

片山 母から手に職をつけるよう言



かたやま・まり●1987年埼玉県生まれ、群馬県育ち。太田市立商業高等学校から群馬県立女子大学、東京藝術大学大学院に進み、2012年に同大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程を修了。卒業制作が若手芸術家の登竜門「アートアワードトーキョー丸の内」でグランプリを受賞。自身の身体をかたどった手縫いのオブジェやペインティング、義足を用いて演出を行ったセルフポートレート作品などで国際的に高い評価を受ける。主な展示に「あいちトリエンナーレ」納屋橋会場(13年)、「無垢と経験の写真——日本の新進作家」東京都写真美術館(17年)、「第58回ヴェネチア・ビエンナーレ」アルセナーレ・ジャルディーニ(19年)、「home again」パリ・ヨーロッパ写真美術館(21年)、「Performer and Participant」テート・モダン(23年)など。主な出版物に『GIFT』(United Vagabonds刊)、第45回木村伊兵衛写真賞受賞がある。

われていたため、商業高校に進学し、簿記部とパソコン部と英語同好会に入っていました。とにかく企業に選んでもらえる人間にならないと就職できないと思って、頑張っていたんです。

でも、就職試験にはつきものの小論文が苦手でした。ファンタジーでもエッセイでもスラスラ書けるのに、小論文になると「うっ……」と詰まっちゃう。「こういう時事問題が出たら、こう書きなさい」ってルールを教わっても、思っていないことは書きたくない。身体が拒否反応を起こしてしまうんです。

たまたま、進路指導担当の先生は美術部の顧問をしていて、私が義足に絵を描いていることをご存じでした。「義足について何か思うことを書いてみたら？ 小論文の練習になるんじゃない」と言われて、文章を提出したところ、群馬青年ビエンナーレという美術の公募展に出してみなしかつて。先生に勧められるまま応募したら、その小論文が一次審査を通過して、次は作品を出しなさいと。——それで小論文に書いたことを作品にすることに。

片山 壁にかかっているものが作品だと思っていたので、とりあえず壁

にかけられるようにしなきゃと思ったんですよ。ホームセンターで買った木枠のボードに三つの絵を直描きし、三つの義足を付けて提出しました。義足はメガネと同じく私の身体の一部であって、個性を彩るアクセサリーであってほしい。それでいて、大地に根を張って私の身体を支える幹のようなもの。でも、義足には血が通っておらず、私の足ではなく道具の一つでしかないという、義足への三つの思いを表現したんです。審査員からはそのコンセプトが評価されて、奨励賞をいただきました。

ただ、作品自体は稚拙だって言われました。私、負けず嫌いなんですよ。じゃ、もっといいものを作ってやると。それで、どうしたらいいのか聞きたくて授賞式に出かけて行ったら、カフェの外で煙草を吸っている金髪の男性の周りに人だかりができています。その人が私を見つけて「君、片山真理ちゃんでしょ。審査員の東谷隆司あすまやたかしです」と。そして、私に向かって宣告したんです。「君は今日からアーティストだからね」って。——受賞をきっかけに群馬県立女子大学で美学美術史を専攻し、さらに東京藝術大学大学院に進学しまし

た。それでもアーティストで身を立っていくという感じにはならなかったんですか。

片山 進学しても自分がアーティストだという感じにはなれなかったです。私は「普通」より劣っているから、みんなと同じように就職して、結婚をして子どもを産んで、一軒家に住んで白い車に乗るといって、そんなステレオタイプな人生を送ることで、障がい者でも周りから認めてもらえるかもしれないと思っていましたね。リクルートスーツをいつも持ち歩いていて、授業後にハローワークの障がい者窓口に通っていました。でも、就職先は全然見つからなくて。——そのうちに気持ちがアートに向かって行ったり。

片山 東谷さんがいるんなアートの世界を教えてください。どういうことが美しいこととか、東谷さんの考え方を私なりに深めてきました。学生だから時間もあるし、アートをたくさん勉強できて、楽しくて楽しくて。

そのうちお仕事の依頼も来るようになって、東谷さんが企画した展覧会で私の作品が初めて売れたんですよ。A4サイズの写真作品。一万円

でした。

—— 作品がお金に換わったことで、アーティストとしての自覚も生まれただということですね。

片山 はい、もう自覚しないといけ

他者とのつながりが、メッセージに力を与える

—— その後、アーティストとして活躍されますが、写真集『GUT』を拝見すると途中で作品に変化を感じます。

片山 二〇一六年の瀬戸内国際芸術祭への出展がひとつの転機になりました。群馬の自宅から香川県の直島に毎月通って、直島の人たちと仲良くなって、じゃ、一緒につくろうかとなって。それまでは、自分の部屋というクローズドな空間で、自分の身体をマネキンにして自分が作ったオブジェなどを演出してきたので、作品作りにおいて社会と関わってこなかったんですよ。そこに初めて他者が入ってきて、最初は違和感が凄かったんです。ちょうどこの頃妊娠したのですが、つわりがひどくてひどくて仕方がないみたいなの。でも、やり取りしていくうちに、作品と私が

ないと。買ってくれた人に向かって「私はアーティストじゃないんです」と言ったら怒られるでしょう。これからはアーティストとして生きていく。と。大学院の一年生のときでした。

だんだんコミュニケーションできるようになってきて、なるほど、大丈夫だね。

人をつくっていくことで自分ではできない規模になるし、メッセージ性とか伝わり方も変化するので、最初の違和感が楽しさに変わっていったんですね。他者とのコミュニケーションが作品に変わっていくのが、凄く楽しかったんです。

—— その経験は善足で履くことができるハイヒールを特注し、街やステージに立つ「ハイヒール・プロジェクト」にも影響を与えたんでしょうか。

片山 二〇一一年に「ハイヒール・プロジェクト」を始めたとき、最初はその自分のためでした。ハイヒールを履いてステージに立ちたいから、そのために義足をつくって、靴をつくっていく。自分で自由な選択をし

たい。障がい者だから諦めることはないよね。

でも、社会と関わっていくうちに、不自由なのは障がい者だけではない、社会が「女性だから」「男性だから」「ママだから」とタグをつけることで、不自由になっている人が凄く多いことに気付いたんです。このプロジェクトはみんなが必要としているんじゃないかと。だから、二〇二二年からセルジオ・ロッシと始めた「ハイヒール・プロジェクト」

第二弾では、障がい者というくくりだけじゃなくて、もっと開けた活動にしたいと思って取り組んでいます。

ただ、第一弾よりもずっと大規模なプロジェクトで、最初は正直怖かったです。でも、セルジオ・ロッシの工場では職人さんたちがみんな、自分やプロジェクトを知っていてくれて、この大きなプロジェクトをみんなで作っているんだと感じられました。それが強さになりましたし、みんなで作れるから怖くない。これは直島での経験からのつながりなんだと感じています。

—— 活動を通じて、片山さん自身にも変化がありましたか。

片山 ある意味、私は障がい者らし

く生きていたんだと思います。障がい者だし、社会に認められるようにしなきゃ。でも、その生き方が楽しくなかったんですよ。私らしく生きなきゃと思うことで、私らしくという枠に自分を閉じ込めていて。でも、その私らしさって自分でただ作っているだけなんですよ。プロジェクトを通して、こうした不自由な生き方から解放されていってるんだと思います。

最近の子育てを通して考えさせられることも多いです。娘は今年小学生になりましたが、彼女にとって私が普通だと思って生きてきたのに、彼女のコミュニティが広がっていくと「あれっ」と思う瞬間がいくつか来るだろう。その準備として、娘や彼女を取り巻く環境とか子どもたちに対して、自分のことをどう分かりやすく説明するかが最近の課題です。これは障がいがあってもなくても、難しいことですよ。でも一〇〇%の答えを与えてもいいじゃない。例えば「何で指が二本なの?」と尋ねる子には「君は何で五本あるの?」と返したり。そうすると「確かに何で五本なんだろう?」と友だち同士で考えてくれたりします。



イタリアでのセルジオ ロッシのデザイナーとの2ショット
(Photo by Herbert Hunger)

私の人生を振り返ると、障がいというものを隠して、気付かれないように

時空を超えて伝えていきたい

LOVE&PEACE&HOPE

—— あらためて片山さんにとってのアートとは、どういうものなんでしょう。

片山 以前は、展覧会に呼ばれて作ることは仕事だと自覚していて、「アートは職業です」と堂々と言いきっていました。お金になる仕事のアートしかなかったから、これは生活の手段だと。ほかに仕事があるんだったら、そっちをやりたいくらいい

うに生きてきた。特別扱いされたくなくて、世の中の普通に紛れ込みたかったんですね。でも、そんな姿を娘に見せてしまうと、きつと彼女も同じように私のことを隠そうと思う。それは生き方として健康的じゃないなと。今、私はハイヒールを履けるし、タイトスカートもジャケットもビシッと着れる。それはそれで気持ち良さを感じる反面、障がい者である自分を洋服で隠すことに負い目もあって、そこはどう決着をつけるか。私が義足にかっこよくアートを描いて外に見せることは、その決着なのかもしれないですね。

本気でそう思っていました。

ところが、ここ数年で考えが変わってきたんです。今年マドリッドのプラド美術館を訪問したんですが、そこでゴヤやベラスケスの作品を鑑賞しているうちに、作家の彼らとつながれる感覚になったんです。子どもの頃、おじいちゃんで行った田舎の展覧会での体験に似ているかもしれません。私の恩師で、スーザ

ン・ソントグの訳者でもある木幡和枝先生は「作品と出会うことで、一〇〇年前に生きた作家とも友人になれるのよ」と言っていました。それってこれなのかもと。アートは国籍も性別も年齢も時代も時空も超え、作家が生きた社会や意志をその作品から感じることができんですね。だから予言的なSFとか発明みたいなものかもしれません。

作家は自分の寿命よりも長く残る作品をつくる責任がある。そう考えると、アートは今日のご飯を食べるためだけの単純な経済活動じゃない、という自覚に変わってきたんです。五〇年後、一〇〇年後に、私の作品が誰かと誰かをつなげていくかもしれない。責任を自覚し、娘も生まれたことで、時空と時代が前後に広がり、私がやっていることは今のためじゃないんだと感じています。

—— そうした思いの変化は、作品にどういう影響を与えていますか。

片山 明らかに作品の持つ規模感が変わりました。時間や距離感が広がることによって、ピンポイントのものにフォーカスしなくてもよい。五〇年後の人が見た時にどう分かっ

てくれるかな、どう伝わるかなと。もっと広く伝えることで、何かが変わるかもしれないという希望が持てるようになりました。

振り返ってみると、私は高校生の頃からアートに希望を持っていたんです。私とあなたの間でのけんかは、規模が変われば国家間の戦争にもなる。時代や時空を超えられるアートの作品を通じて共感が広がったら、世の中は良い方向に変わるんじゃないかって。だけど、それは私の仕事じゃないと思っていたし、私にはできないと思っていた。でも今は、世の中を変えていくために、私も何かができるかもしれないと思っています。

—— 作品を通じて伝えたいメッセージは。

片山 具体的に言うのは難しいんですけど、今私の義足に描いている「LOVE&PEACE&HOPE」この三つだけは本当に重要だと思っています。希望を持つには平和がなければいけない。その平和に対しては愛がないといけない、そう信じたいですからね。

—— 本日は、ありがとうございます。

地域の底力——鹿児島県肝属郡肝付町

行政の先駆的な試みが 多様な可能性を生む 鹿児島県肝付町

きもつきちよう

日常の暮らしを支えるさまざまなサポートや、
先進性の高い数多くのチャレンジを続ける
鹿児島県肝付町。
豊かな自然と未来的な発想が織りなす相乗効果が、
九州南端に位置する町を変えていく。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

肝付町南東部に位置する、JAXAのロケット発射場「内之浦宇宙空間観測所」。手前はM-V（ミューファイブ）型ロケットの実物大模型、奥は数々の衛星を打ち上げてきたロケットの発射装置。敷地内にある「宇宙科学資料館」では、日本の宇宙事業史などが紹介されている。



「皆さんから選ばれる町になるためには、チャレンジを続けなければなりません。先発の試みには失敗のリスクもありますが、その逆境から人は成長すると思っています」と、町長の永野和行氏は語る。

充実のサポートとデジタル化が進む町

大隅半島南東部に位置する鹿児島県肝付郡肝付町は、太平洋に面した人口約一万四〇〇〇人の自治体だ。その誕生は二〇〇五年、旧高山町と旧内之浦町との合併による。通年の気候は、温暖多雨。町の約八割を山林が占めるほか、ウミガメが産卵に訪れる海岸があるなど豊かな自然に恵まれ、第一次産業が経済の柱になっている。

九州の先端近く、のどかな景色が広がるその肝付町では現在、移住者が増加傾向にあるという。

「二〇二三年度は五一組二〇二名、移住サポートセンター開設（二〇二二年度）からの累計では計八三組計一七七名の方が肝付町に移住されています」

そう話すのは、役場職員を経て二〇〇九年から現

職を務める町長の永野和行氏だ。二〇二三年には田舎への移住を案内する情報誌で、肝付町が住みたい地域のランキングにおいて南九州・沖縄エリアの子育て部門第一位に輝いたという。

「移住のキーワードは、きれいな海や山。肝付町を選んでいただいた時点で、不便な環境は理解されているでしょう。役場近辺の町なかではなく、もっぱら郊外が選ばれていますが、暮らしにくいという話は聞こえてきません」

自然環境に加えて、手厚い町のサポートが移住を後押しする。国の制度に先駆けて二〇一七年度から始まった幼稚園、保育園の無償化、一八歳までの医療費全額助成、移住者への各種補助金など、とりわけ若い世代にとっては心強い制度が整っている。

一方で高齢者に向けては、民間のタクシー事業者と連携した「A ITakushi」を二〇一九年に導入。予約の状況に応じてA Iが効率的な運行経路を考える乗り合いシステムは、高齢者から塾に通うような子どもたちまで広く利用され、高齢者の免許返納率が高まる

左／一九世紀初頭に建てられた「二階堂家住宅」は江戸時代の郷士の住まいで、衆議院議員を務めた故・二階堂進氏の生家でもある。国の重要文化財指定。下／平安時代に創建された「四十九所神社」では例年十月、約九〇〇年にわたり受け継がれてきた流鏑馬が奉納される。



といった効果とともに、高齢者とも若い世代のコミュニケーションの場にもなっているという。

主産業である畜産業や農業でも、A I、I C T、I O Tを組み合わせた効率的な管理方法が取り入れられているが、それら先進的な取り組みを、町内全域に設置された光ファイバーケーブルが支える。

「人口に限らず、情報の過疎化も地域の衰退につながります。この町へ新幹線を誘致するのは難しいものの、情報の新幹線は引ける



との思いから、二〇〇九年の立候補の際に光ファイバーケーブルの設置を公約に掲げました」

就任後に公約を果たした当初、快適な通信環境を喜んだのは事業者や若い世代に限られたが、スマートフォンやSNSの普及により、高齢者を含めたより幅広い層がその利便性を実感するようになった。町役場においても、ペーパーレス、オンライン、クラウドの導入といったデジタル化が積極的に進められている。

町の北西部、笠之原地区に設置された、1/2.5スケールのイプシロンロケットの模型。そのほかにも肝付町役場内之浦総合支所でロケット関連の展示が見られるなど、まちを歩けば随所で宇宙を感じられる。

おすすめ半島スマートエネルギーの建物は高断熱、高気密を徹底し、屋根には太陽光パネルを設置。蓄電池と併せ、災害にも強いゼロエネルギーオフィスとなっている。



九市町をつなげる役割を意識しています。今はまだ利益の寄付に留まっているものの、今後は公共交通や教育関連など、各自自治体の課題について、事業として解決していくことを目指していきます」

電力事業の分社化と同じタイミングで、あらたに農業法人も手がけるようになった。

「農業法人では肝付町南部の岸良地区周辺に育つかんきつ『辺塚だいたい』の普及や、コーヒーの栽培にチャレンジする計画があります。畑違いと思われるかもしれませんが、われわれの柱は地方創生ですから、経営の多角化については最初から想定していました」

事業の拡大とともに、雇用の場の広がりにも期待がかかる。

宇宙に近い町としてのあらたな活動と発信

肝付町南東部の内之浦地区には、日本の宇宙事業をリードしてきた施設があることにも注目したい。一九七〇年に日本初の人工衛

星「おおすみ」を、二〇〇三年には小惑星探査機「はやぶさ」を打ち上げたJAXAの内之浦宇宙空間観測所だ（一九六二年の開所時は、東京大学鹿兒島宇宙空間観測所）。

「日本の宇宙開発の父」ともいわれる糸川英夫博士が、この地を選んだ際に目指したのは「地域とロケット発射場の共存」。着工時から住民と関係者の交流が重ねられ、炊き出しなどの貢献は、住民とJAXA関係者の心を一つにしたと振り返るのは、きもつき宇宙協議会代表理事の村岡知行氏だ。

ロケットの打ち上げとともに、多くの人が訪れて宿泊施設や飲食店は増え続けたが、時代の変遷とともに諸々の事情から発射回数が減少。賑わいの灯が消えてい

く様に危機感を覚えた村岡氏は、二〇一二年に地域の再活性化を図るための団体として、内之浦創星会を立ち上げた。

「それまでは施設の存在やロケットの発射をビジネスの観点でとらえることはなく、その必要もありませんでした。しかしながら状況を変えなければいけないとの危機感から、世代、職種を超えた多様なメンバーが集まりました」

そう話す村岡氏もまた、実は塗



内之浦宇宙空間観測所近くに立つ宙の家。表にはテーブル席があり、訪れる人たちの憩いの場に。

「合併前の旧内之浦町エリアだけではなく旧高山町エリアの子どもたちも最近、『うちの町はロケットが上がる』と自慢するようになったのが嬉しい」と話す、きもつき宇宙協議会代表理事の村岡知行氏。後ろは宙の家の敷地内、JAXAから譲り受けた直径3.6メートルのパラボラアンテナ。



宇宙食からJAXAのグッズまで、多種多様なアイテムがそろった宙の家。内之浦宇宙空間観測所から打ち上げられたロケットをあしらった、オリジナルのアイテムも人気の。

装業を営む。その後、肝付町やJAXA、民間事業者などが手を結び、「宇宙の町 肝付町」として情報を発信する、きもつき宇宙協議会が二〇一六年に発足。二〇一九年には、訪れる見学者などの要望に応える形で、協議会が運営する宇宙関連のグッズショップ「宙の家」が誕生した。内之浦宇宙空間観測所の施設からごく近いロケーションだが、村岡氏は想定していなかった客層の変化を感じているという。

「宇宙やロケットに魅了されるのはマニアや子どもたちというイメージを持っていたものの、関連ニュースが増えた影響からか、ここ数年、若い女性の旅行者など幅広い層が宙の家を訪れるようになりました。あらたな飲食店やゲストハウスができるなど、地域も少



県内有数の伊勢エビの水揚げ量がある内之浦漁港。停泊するのは、昌徳丸の船団。

さまざまな課題を抱える 若い漁師たちの挑戦

内之浦宇宙空間観測所に近い内之浦漁港では、三代にわたり漁業を営む「昌徳丸」のチャレンジが耳目を集める。これまでは父親である代表取締役の柳川哲郎氏のもと、拓哉氏、隼太氏、三帆氏の兄弟がまき網漁、定置網漁にそれぞれ従事してきた。

加えて二〇二三年夏、拓

しずつ動きだしています」

二〇一三年には種子島宇宙センターを有する鹿児島県南種子町と肝付町が友好都市提携「宇宙兄弟」を宣言し、連携したPRも行われている。現在、協議会が思い描くのは、民間企業が内之浦からロケットを発射する未来図だ。

「打ち上げ回数の増加とともに、発射日を中心とした交流人口の増加を目標にしていますが、あくまでも通過点にすぎません。先々には通年、観光客が訪れる地域にしていきたいというのがわれわれの思いです」



昌徳丸の柳川拓哉氏（左）と隼太氏（右）。後継者や漁獲量が減る厳しい状況にある中、自分たちは何ができるのだろうかとの思いからプロジェクトが生まれたという。

哉氏を中心となってあらたな事業に着手した。「ロコフィッシュ」と名付けた未利用魚の直接販売を行う、「U・Locoプロジェクト」がスタートした背景を拓哉氏はこう語る。

「未利用魚とは、アジやサバのような人気の魚種とは異なり、市場に出しても値段がつかずに海に投棄される魚のことです。近年、海の資源が減る中で魚を捨ててしまいうのはもったいないとの思いがあり、おいしさが広まれば価値が上がるのではないかと考えました」

例えばシユモクザメや、アジをつぶしたような形のギンカガミといった一般には馴染みのない魚



ギンカガミやカゴカキダイなど、ロコフィッシュが並ぶ。県の林務水産課の技師だった福留慶氏がコーディネーターとしてU-Locoプロジェクトに加入し、情報発信や広報物の制作などのサポート役を務める。

（提供：（有）昌徳丸）

を、ロコフィッシュとしてネットショップで料理店や消費者に販売。朝に揚がったばかりの新鮮な状態で発送する。隣接する鹿屋市の鮮魚店の協力を得て、一夜干しなどの加工品も扱う。

発信はSNSが中心だが全国各地から注文が入り、リピーターも増えてきた。とは次男の隼太氏だ。

「今は採算面よりも未利用魚の普及を重視していますし、ロコフィッシュの販売



昌徳丸では現在、インドネシアから来日した10名の実習生が、まき網漁、定置網漁の船に乗る。実習期間は3年だが、その後に特定技能実習生として残るケースも少なくない。後輩の指導者としても頼りにされている。

はU・Locoプロジェクトの一部でしかありません。漁場づくりのために磯の海藻を増やす藻場造成や、網のリサイクルを進めるなど、さらなる展開も考えています」

自社で加工場を持ちたいという将来的なビジョンもあり、ロコフィッシュの販売はその第一歩だという拓哉氏が続ける。

「最終的にはU・Locoプロジェクトを通して広く漁業に関心を持ってもらい、後継者と働く場を増やしていくことを大きな目標としています。実際、自分たちの活動を知り、他地域から定置網の漁師としてうちに就職する人も出



ふるさと納税の返礼品にもなっている、「ででこしょう」(右)とハバネロを使用する液体調味料「ででスコ」(左)。例年、辺塚だいたい収穫時の秋に手作業で仕込みを行う。(写真提供:上 泰寿)



肝付町岸良地区周辺や隣接する南大隅町に昔から自生していた辺塚だいたい、地域固有の香酸柑橘として2017年に地理的表示(GI)保護制度に登録された。(写真提供:上 泰寿)

できました。周辺の大学や地元の中学校でお話しする機会もあり、その結果、インターンシップ制度で働きに来た生徒さんもあります。今後もしそういう流れが広がっていくことが、U・L・Coopプロジェクトの目指すところなんです」

二〇二三年秋には、肝付町の依頼を受けて地元の祭りで振る舞ったシユモクザメの唐揚げが人気を博した。町のふるさと納税にもロコフィッシュが選ばれ、プロジェクトは少しずつ花開きつつある。

手つかずの環境が 移住者夫妻の開拓意欲を かきたてる

肝付町の南端に広がる岸良地区では、前述した辺塚だいたいを活用して移住者夫妻があらたな特産品を生み出した。「岸良リトリート」の坂田蔵人氏とみのり氏が手がけた「ででこしょう」だ。

「でで」とは、だいだいの方言。農業や化学肥料を使わずに育てた辺塚だいたいと青唐辛子、海水を炊いた塩を材料とする柚子胡椒代わりの自家製品が周囲の好評を得て、二〇一七年に商品化された。

岸良リトリートの坂田蔵人氏・みのり氏夫妻。購入時、1300坪の土地は建物を含めて木々に埋もれた状況だったが、夫妻が「開拓」と呼ぶ尽力が重ねられ、海を見渡せる美しい場所へと生まれ変わった。



き方を考え始めたのがきっかけでした。町なかでの消費者ではなく、自らの力で何かを作り出す生活をしたかった。移住先を探し各地を旅して歩きました」

岸良を選んだ理由だ。肝付町では移住のサポート体制が整っていない時代だったが、まずはそれが功を奏したという。

「用意された仕事や住居が移住の決め手になるケースは多いものの、自分たちにとって、先は逆で、先の暮らしが



制限されるように感じました。少数派かもしれないですが、そういう考えの人はいると思います」
みのり氏も、当時を振り返る。「神奈川にいたころ、地元のカフェでとてもいい香りのするかんきつを知り、それが辺塚だいたいでした。さらには縁あって岸良に来たとき、美しい自然とともに手つかずの海と山に囲まれたこの地に魅了されました。移住者のコミュニティやしゃれた店が既にできていたほかの地域とは異なり、ここでどんなことができるのだろう、どんな出会いがあるのだろうとわくわくしましたね」

岸良リトリートの約一三〇〇坪



岸良リトリートの建物は、来客のもてなしの際などにカフェとして活用されることも。廃材を利用した器や調度品、空間まで、すべてが坂田夫妻による手づくり。

の敷地にはかんきつ類からトロピ
カルフルーツまで多様な果樹が植
えられ、ほかの土地でも夫妻は米

内之浦宇宙空間観測所が立つのは、太平洋を望む
山腹。ロケット打ち上げ時の見学場は敷地から
少々離れた場所にあるが、地響きを感じるダイナ
ミックな体験ができる。



上／太平洋に面した、岸良地区へと続く国道四四八号線。「今なお、
出先から車で戻ってくると、ああ、きれいだなあ」と感動します」と
坂田夫妻は語る。下／初夏にはウミガメの産卵地となる岸良海岸。



内之浦地区、標高約一八七メートルの叶岳山頂
には、第一二代景行天皇が熊襲討伐を祈願した
と伝えられる叶嶽神社があり、中腹の「叶えの鐘」
など周辺の散策も楽しめる。



や野菜の栽培を行っているとい
う。無農薬、無肥料の手法や自給
自足に近い暮らしに興味を持っ
た、地域住民が訪れることもある
そうだ。

地元の高校で英語教師としても
働く蔵人氏は海水を使った塩づく
りの事業化を進めており、やりた
いことが多すぎるといふ夫妻は
「可能性は無限大」と、そろって笑
顔を見せた。

住民の幸せな生活を思い 行政のチャレンジは続く

肝付町でお話を伺った方々に共
通するのは、現状に立ち止まるこ
となく、歩み続けていることだっ
た。町長の永野氏のビジョンもま

た、さらなる先を見据えている。

「まちづくりは人づくり。職員
には情報戦略が大切だと常々話し
ていますし、担当以外のテーマで
あっても講演会や勉強会に参加す
るよう勧めています。すぐに結果
が出なくてもいい。五年後、一〇
年後に変化は出てきます。変わっ
ていかなければ時代に取り残され
るし、誰からも選ばれなくなる」

永野氏自身は週末を利用し、町
民の集まりに積極的に出向く。日
常の会話の延長なら話しやすく、
公式の場では耳にできないような
不安や不満、小さな声も拾えると
の考えゆえだ。

二〇二三年度には「宇宙のまち
づくり推進課」を設置。民間企業
による内之浦からのロケット打ち
上げ誘致を積極的に推し進めてい
る。子どもたちにはJAXAの職
員の協力を得て宇宙学習の場が設
けられ、それもまた次なる時代の
扉を開く鍵になるかもしれない。

ふるさと納税の窓口から特産品
開発、観光まで広く担う、地域商
社設立の準備も始まっている。

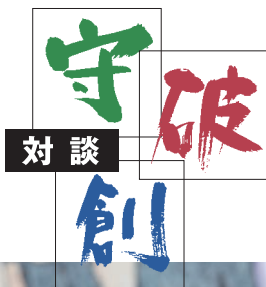
「住民の皆さんが夢と希望を持
ち、安心して暮らせる仕組みをつ

くることで田舎が変わるのではな
いかと、長年にわたり思ってきた。
光ファイバーケーブルの設
置やスマートエネルギー事業同
様、地域商社の設立も新たな事業
や雇用を場を広げる土台づくりの
一環です。こうしたインフラが整
えば、あとは住民の皆さんがそれ
ぞれの知恵を出して活用してくだ
さると思います」

先駆的な行政の取り組みが、豊
かな暮らしを広げていく。宇宙が
より身近な存在になるであろう未
来に、肝付町はどのような進化を
遂げているのだろうか。



岸良地区の海岸線には、目の
前に太平洋が広がる憩いの場
が複数設けられている。



新しい五千円札の顔となる津田梅子。6歳で女子留学生の一員として渡米し、17歳で帰国する途上、「日本の女性のための学校をつくろう」と夢を描いた。その学校を前身とする津田塾大学の高橋裕子学長は、梅子研究の第一人者。日本の女子教育のパイオニアとなった梅子の足跡を、その内面や思索にも迫りつつ、内田眞一副総裁と語り合った。



日本銀行副総裁

内田眞一

UCHIDA Shinichi

1986年東京大学法学部卒業後、日本銀行入行。2007年企画局参事役、08年総務人事局参事役、10年新潟支店長、12年企画局長、17年名古屋支店長、18年日本銀行理事、22年日本銀行理事再任、23年3月日本銀行副総裁就任。

津田梅子の生涯とその志を継ぐ 女性リーダーが変える社会



津田塾大学学長

高橋裕子

TAKAHASHI Yuko

1980年津田塾大学学芸学部英文学科卒業。83年米国カンザス大学大学院歴史学研究科修士課程修了。84年筑波大学大学院地域研究研究科修士課程修了。89年カンザス大学大学院教育学研究科博士課程修了。Ph.D. (教育学)。専門は米国社会史(家族・女性・教育)、ジェンダー論。桜美林大学国際学部専任講師、同助教授を経て、97年から津田塾大学学芸学部英文学科助教授、2004年から同教授。16年からは同学長を務める。この間、03年にスタンフォード大学、13年にはウェルズリー大学でフルブライト研究員も務めた。著書に『津田梅子の社会史』(玉川大学出版部、アメリカ学会清水博賞受賞)、『津田梅子——女子教育を拓く』(岩波ジュニア新書)。共編著に『津田梅子を支えた人びと』(有斐閣)、『女性学長はどうすれば増えるか——国内外の現状分析と女性学長からのメッセージ』(東信堂)など。

米国家庭への留学が原点
明治の女性に扉を開いた

内田 日本銀行では新紙幣三種類について七月三日に発行を開始し、流通を始めます。その中で、五千円札の新たな肖像となる津田梅子の研究において高橋先生は第一人者でいらっしゃいます。この機会に、梅子の生涯や実績が広く知られるといいなと思っています。高橋 私もそのように強く願っています。梅子は「日本初の女子留学生」と紹介されることが多いのですが、その留学先の米国では女性が紙幣の肖像になったことはありません。日本のジェンダーギャップ指数ランキングが国際的に低い中で、女子教育のパイオニアであり、現在も継続する私塾(津田塾)を創立した起業家でもある梅子を選ばれた。国内外の人々に梅子のことをもっと知っていただきたいです。

内田 本当にそう思いますね。私自身も、これまで梅子については六歳の時に岩倉使節団に同行して米国に渡ったこと、津田塾大学

の前身である私塾（女子英学塾）を創立したことを知っているくらいでした。今回、高橋先生のご著書を読み、明治から大正にかけての近代教育の草創期を代表する一人であったと認識しました。ご著書は梅子の人物像をいきいきと描き出していて、読み物としても大変面白いと感じました。

高橋 梅子は、ワシントンD.C.の日本弁務使館に勤務する森有礼ありのりの書記官、チャールズ・ランマン夫妻に七歳で託され、約一〇年間夫妻の自邸に身を置きました。一八歳になる直前に日本に戻りましたが、帰国後、ランマン夫妻宛てに膨大な書簡を送っています。それらは *The Attie Letters* と題する本にまとめられていますが、帰国後の梅子が常に財政的な心配をしていたこともつづられているんです。米国滞在は官費留学生でしたが、からお金の心配などなかったのですが、帰国後は日本語が不自由になったことに加え、生計を立てるための職が男子の留学生のように用意されていなかった。今、津田塾大で学ぶ学生たちと同じ年齢の頃に、梅子も自分の道をどう切

り拓くか、思い悩んでいたのです。**内田** 梅子を含む五人の官費女子留学生たちが米国に派遣されたのは明治初期の一八七一年。具体的には明治初期の一八七一年。具体的に計画したのは、当時樺太専任開拓使次官の黒田清隆や、森有礼などでした。彼女たちは男性の留学生よりずっと年下でしたが、これは何か意図があったのでしょうか。

高橋 日本の少女に米国のホームライフを経験させる、という狙いがありました。男子のエリートを派遣する場合は特定の明確なゴール——日本の近代化に必要な鉱業や鉄道などを学ばせる狙い——がありました。米国の家庭は男子のエリートがなかなか分け入ることのできない領域だったわけです。黒田をはじめ明治のリーダーたちは米国の女性の家庭内外で及ぼす影響力に注目していました。日本の女子が米国家庭で成長して帰国することが、近代化・文明化に資すると思ったのです。米国女性のありようは、梅子の中に自然と吸収されていきました。**内田** それが梅子の原点となり、日本で教育者の道を歩み、そして

一九〇〇年には女子英学塾を創立します。その時、梅子はどのような女性を育てたいと思っていたのでしょうか。

高橋 「all-round women」は梅子が開校式の式辞で使った言葉です。式辞は日本語でしたが、唯一この言葉だけは英語でした。当時は、良妻賢母という規範の下でしか女子教育が考えられておらず、旧制高等学校や帝国大学に女子の入学は許されません。そんな明治の時代にあつて、梅子は女性にリベラルアーツ教育の扉を開き、広い視野を獲得してほしいと願っていました。

しかし広い視野を獲得するだけでは、自立した個人として生きていけない。梅子は、女性も経済的自立を可能にする職能を持つように促しました。リベラルアーツとともに専門教育を重視し、「英学」を修めて高等女学校の英語教員になるキャリアパスを示しました。「all-round women」という日本語には置き換えられない言葉。梅子はそのに、女性が自立した個人となり、世界で活躍してほしいという思いを込めたのです。

奨学金を創設し 後進の女性にも留学への道

内田 米国に官費留学した五人の女子のうち、二人が一年弱で日本に帰国しましたが、最年少だった梅子のほか、永井繁子と山川捨松は留学期間を全うしました。ただ、繁子も捨松も帰国後すぐに結婚。梅子はどう思ったのでしょうか。

高橋 繁子は米国で出会った日本海軍の瓜生外吉と婚約をしていました。しかし捨松は梅子と日本に船で帰る途上、「日本の女性のための学校をつくらう」と夢を語り合い、しかもヴァッサー大を卒業して日本女性として初の学位を得た人でした。梅子とすれば自分は捨松をアシストする役目であると考えていました。その捨松が帰国後ほどなくして政府高官の大山巖と結婚したことに、梅子は少なからず落胆しました。繁子と捨松、それにランマン夫人のアデラインも梅子を心配して結婚を勧めたのですが、梅子はアデライン宛ての書簡で「私は自分の学校をつくりたいのです。結婚はしません」と、驚くほどきっぱりと宣言したのです。

梅子と捨松の道は分かれたように見えますが、捨松は大山巖との結婚で社会的により大きな影響を及ぼすことができると考えたのだと思います。政府高官の妻という立場から、梅子への協力を惜しまなかった。例えば捨松は官立の華族女学校の創設準備委員となつて、帰国後三年間も正規の教職に就く機会がなかった梅子を同女学校の教授補に迎えたり、女子英学塾を社団法人化する際には大山捨松の名を申請書の筆頭に書いたりしました。これまで捨松と梅子の二人については結婚を選択した女性と独身を選択した女性という対立的な描き方で取り上げられたことも少なくありません。実際はそんなに単純ではなく、帰国の途上で語り合った「学校をつくる」夢は梅子が主導し、捨松が後方から力強く支援する形で進展していき

ました。

内田 女子英学塾の創立・運営に当たっては、梅子は米国で知己を得た人々からも協力を得ています。

高橋 日米から非常に強く支えてもらえる、そういう魅力が梅子は持っていたんだろうと思います。

梅子は学校をつくる前に奨学金

制度もつくっています。きっかけは二度目の米国留学。二四歳から二年間、プリンマー大で生物学を専攻しました。後にノーベル賞を受賞するT・H・モーガン博士の下でカエルの子の発生の研究をし、博士と共著論文も書いた。梅子はその二年間がとても充実していたので、自らが得た高等教育の機会を日本女性たちと分かち合いたいと、米国で学ぶための奨学金制度を考えたのです。篤志家のモリス夫人やプリンマー大のM・ケアリ・トマス学部長らが親身になってファンドライジングを支援してくれました。梅子は目標の八〇〇〇ドルを一年間で集めて「日本女性米国奨学金」を創設。その資金により、なんと一九七六年まで累計で二五人の日本女性たちがプリンマー大などで学びました。

内田 梅子は自分が留学しただけでなく、未来の日本女性たちにも機会を拡大した。普通は、自分の勉強だけでも精一杯でしょうから、素晴らしいことだと思います。

高橋 梅子が二度目の米国留学をした頃は、米国社会の中産階級の女性たちの間に高等教育支援運動があった時期でした。梅子はその

潮流を捉え、ホップ・ステップ・ジャンプしていく力とした。プリンマー大で生物学を修めたことをホップとすれば、次のステップで日本女性たちのための奨学金をつくり、そして日本での私塾創立へとジャンプしました。奨学金創設に協力してくれた米国の女性たちは、日本で女性の高等教育を開始するという梅子の夢も理解して、女子英学塾創立に原資をもたらず寄付母体となったのです。

梅子の夢から今につながる 女子大学でのリーダー育成

内田 梅子がプリンマー大で生物学を専攻したことは興味深いです。理系分野を選んだのは、どんな思いがあったのでしょうか。

高橋 梅子は英語の教授法を学ぶということで二度目の留学に赴きましたが、プリンマー大では歴史学や英文学を学び、さらに生物学も取ってみてこれも面白いと思ったのでしよう。ただ当時、米国でも、女性が男性と伍して高度な研究をしたりアカデミックトレーニングを受けたりすると、健康を害して生殖機能に悪影響を及ぼすと警鐘が鳴らされていたのです。そ

れに対しトマス学部長は、女性も男性と同等の学問への潜在能力があるということを実証したいと考えていました。

内田 モーガン博士との共著論文など、梅子は結果を残してそれを実証したといえますね。津田塾大も理系の学科をお持ちです。

高橋 津田塾大は昨年、理科創設八〇周年でした。第二次大戦中、国の方針で英語が敵性語とされた際に理科を設け、その後は数学科、情報科学科に改組し、そういった分野で活躍する女性を数多く輩出できたことは、梅子も喜んでいるのではないかなと思います。

内田 日銀にも津田塾大の出身者が多数在職し、その多くは情報システム関係の仕事に携わっています。彼女たちが日本の決済システムの中枢を担っている。大変ありがたいと思っています。

欧州では、中央銀行デジタル通貨(CBDC)を発行するという議論が進んでいます。デジタル社会にふさわしい形で、中央銀行が果たしていくべき役割は何か、常に考えていかなければなりません。その中で、日本銀行にとってシステムに関する仕事は、ますます



す重要になってくると思います。

女性の大学教育という意味では共学の大学で学ぶという選択もあるわけですが、女子大学の意義や役割についてどうお考えですか。

高橋 昨年、ある女子大学が新規学生募集を停止すると発表したところ、女子大学の役割は終わった、良妻賢母の教育はもう古いというネット記事がたくさん出ました。それは射た話ではありません。女子大学も多様ですが、津田塾大は良妻賢母を謳ったことなく、変革を担う女性リーダーの輩出を教育のモットーに掲げています。女子大学の学生は、男性

がいないことで性役割から自由になれる。ゼミでも課外活動でも、すべての場面で常に女子学生が中心になる。そういう状況は社会に出てからはなかなかないでしょう。ジェンダーギャップ指数（二〇二三年）が世界一四六カ国中一二五位の日本では、女性はいまだに社会の周縁に置かれています。だからこそ意見を述べたりリーダーシップを取ったりすることが重要です。そのメンタリティーと基盤を女子大学で身につけることができるのではないかと思います。

内田 むしろ女子大学だからこそリーダーを輩出できると。

高橋 はい。女子大学にはロールモデルとなる女性に出会いやすいというメリットもあると思います。副総裁は大学生の時、女性の先生から何単位を取られましたか。

内田 四〇年前のことですが、たぶん、ないと思います。逆に、三〇年前、米国の中央銀行のFRBに出身した時は、上司が三人とも女性で、そのうちお二人はお子さんを育てながら勤めておられました。

高橋 私自身は、学部で取得した

単位の六〇七割が女性の先生からでした。二〇代後半ぐらいから、三〇代、四〇代、五〇代、六〇代と、多様なライフステージの女性たちをロールモデルとして見上げながら大学生活を送れた。私自身の人格形成にとっても大きな影響があったと思います。

米国の大学院に留学していた時も、履修した授業の半分弱は女性の教授から習いました。三人のお子さんの育児をしながら素晴らしい本も書いている、そんな女性教授を目の当たりにして、自分も将来そのようにできるかもしれないと感じたものです。

対照的に、国内の共学の大学院で学んだ時には、私の研究科に女性は一人もいなかった。現在でも日本の四年制大学進学率は男女で約一〇ポイントの差があります。大学院進学率ではさらに差がつく。大学における女性と男性の割合は学部、修士、博士と進むにつれて差が大きくなります。大学の上位職——教授や副学長、学長職になると女性の割合は著しく減少します。

内田 女子大学は女性の学長が多いのかと思ったら、そうではない

のですね。

高橋 女子大学も学長は男性のほうが多いのです。日本の大学生たちはこういう風景を見ながら育っています。ジェンダーギャップを改善させていく、政治経済分野で頭角を現す女性たちを輩出していくためには、大学の風景を変えていかなくてはならない。それには大学生はもとより、大学を目指す高校生から意識を変えてもらう、そういう必要があると思います。

内田 お札の肖像に津田梅子を選ばれたということも、その一助になればと思います。教育者であり起業家でもある女性が選ばれ、日本のお札として世の中に流通していくことは重要な意味を持つように思います。

高橋 梅子が肖像に決定したと発表された日、教え子からメールが来たんです。「二〇二四年からは五千円札を見るたびに母校を思い出せそうで嬉しくもあり、お財布を開けるたびに襟を正し精進せよと言われるような心持ちでもありません」と。このような女性がたくさん出てくるように祈っています。

内田 今日は大変良いお話をありがとうございました。

改刷に向けた日本銀行の取り組み

新しい日本銀行券の発行に向けて

二〇二四年七月三日、渋沢栄一の一万円券、津田梅子の五千円券、北里柴三郎の千円券という三種の新しい日本銀行券がいよいよ発行されます。二〇年ぶりの改刷で、3Dホログラムなどで強化された偽造抵抗や、誰でも使いやすいユニバーサルデザインが特徴です。日本銀行では、この新しい日本銀行券を安全かつ円滑に流通させるために、五年をかけて、財務省、国立印刷局、取引先金融機関、金銭機器メーカーなどの関係者と協力しながら準備を進めてきました。その中心を担った発券局と支店の取り組みについて、ご紹介します。

世界初の技術を搭載

改めて、新しい日本銀行券（新券）の特徴を紹介しましょう。

一万円券の表面には実業界で活躍した渋沢栄一・裏面には「赤レンガ駅舎」として親しまれている東京駅（丸の内駅舎）、五千円券の表面には近代的女子高等教育に尽力した津田梅子・裏面には植物のフジ（藤）、千円券の表面にはペスト菌の発見などで知られる北

里柴三郎・裏面には葛飾北斎の浮世絵「富嶽三十六景（神奈川沖浪裏）」が描かれています。券種を示すアラビア数字が大きく記載されるなど、これまで以上にユニバーサルデザインが意識されています。

今回の改刷では、偽造抵抗力の強化も図られました。

「搭載されている偽造防止技術は多岐にわたりますが、特に、肖像が立体的に見えて回転する3Dホログラムや高

【新一万円券】



【新五千円券】



【新千円券】



精細すき入れ（肖像のすかしの周囲に緻密な画線で構成した連続模様を施したもの）など、人の目で見分ける技術による偽造対策を強化しました。また、どなたにとっても使いやすいものとなるようユニバーサルデザインも重視しています。それとともに、三券種を同時に改刷するなど現金取扱機器にかかるコスト抑制も意識しています」

発券局総務課改刷グループ企画役の長尾昌幸さんは、今回の改刷の方針をそう説明します。

このような最先端技術が用いられた背景には、民間での印刷技術の高度化があります。コンピュータの技術革新も目覚ましく、中長期的にみて偽造抵抗力の強化が必要とされています。

その準備には、五年という十分な期間が設けられました。改刷が発表されたのは二〇一九年四月。大まかに言つて、前半は、財務省、国立印刷局とデザインを決めるなど新券製造の準備に、後半は、その備蓄と円滑な流通のための対応に充てられました。改刷グループ企画役補佐の田中健太さんは、発行を見据えた直近の状況をこう話します。「ATMなどの現金取扱機器の改刷対応は銀行券の市中流通の肝なので、メー

カーに機器の開発や改修のために必要なデータの取得の場を設けるなどして、新券への対応をしていただいています。新型コロナウイルスの影響で半導体不足の心配もありましたが、計画的に進めてきたことで、六月末には台数の多い自動販売機等を除き、おおむね完了する見通しと聞いています」

約五〇億枚を全国の本支店へ

日本銀行券は国立印刷局で製造されています。新券の本格的な製造は、二〇二二年六月に始まりました。

日本銀行では、それらをいったん、本店や大阪支店などで引き取り、そこから全国の支店に輸送していきます。本支店の総数は三三。過不足なく、効率良く銀行券を輸送・備蓄するためには綿密な計画が必要です。

その調整を担うのは、需給管理グループです。調整の難しさについて、同グループ企画役の井田明奈さんはこう説明します。

「各店で銀行券の受払量が違うので、過去の取引をベースに、支店の協力を得ながらヒアリングなどでミクロ情報を積み上げて必要な量を予測し輸送します。現行券に加えて新券を輸送する

ため運ぶ回数が増えます。これに伴い日程の調整がより多く必要となるほか、各店の金庫にどの程度のスペースの余裕があるのかも把握しないといけません」

このようなもと、前回改刷時（全国で約五〇億枚）と比較して遜色ない水準の新券の備蓄が必要となります。これだけの量を現行券に加えて輸送するのは容易ではありませんが、計画的に進めてきたことで、二〇二四年三月末時点で、一万円券Ⅱ二四・八億枚、五千円券Ⅱ二・六億枚、千円券Ⅱ一七・九億枚の計四五・三億枚まで備蓄が完了しており、不安なく発行日を迎えられるめどが立っています。

金庫繰りの難しさ

輸送されてきた新券は、七月三日まで本支店の金庫で備蓄します。備蓄時の日本銀行券は四〇万枚単位でパレットに積まれており、そのサイズは一万円券なら幅六四センチメートル、奥行き七六センチメートル、高さ一〇〇センチメートルで、重さ四〇〇キログラムというもの。このような新券を次々に受け入れ、備蓄しながら、現行券の受払業務も行います。

「金庫内には貨幣と銀行券が種類ごとに保管されていますが、五百円券のように現在は発行されていないものの有効なものとして受け入れた古い銀行券もあり、多種多様です。それらを効率的に良く出し入れしつつ、新券を大量に備蓄するため、作業と保管のスペースのバランスを見ながら、安全第一で備蓄を進めています」

と話すのは、各支店への輸送のハブにもなっている日本橋発券課運営保管グループの企画役・寺口博司さんです。効率的な作業・保管のためには、中期および毎月・毎週の受払を見通した上で、金庫内の配置を綿密に計画し確実に実行することが不可欠です。そのため、需給管理グループと連携しながら、日々、業務を行っています。

日々の業務を支える機器もメンテナンス

改刷に当たっては、日々の業務で用いるシステム・機器を新券に対応させる必要もあります。日本銀行券の真偽や再流通の適否を判別する銀行券自動鑑査機、窓口で現金の入出金に用いる窓口現金受払機などです。

新券への対応作業は、主として、入

れ替えではなく、システムの改修で対処しました。

その作業は、研究開発と現場での実用実験を繰り返し、適切な運用が確認できたところで、全店に展開する形で進めてきました。日々の業務を行いながら改修を行うため、現場と綿密に連携し、スケジュールを調整しました。

複数のシステム・機器がある中、最も時間を要したのは銀行券自動鑑査機です。

「優劣はありませんが、その役割上、日本銀行券の信頼性に関わるものであり、非常に重要な機器です。銀行券自動鑑査機においては、改刷の発表と同時にシステム対応がスタートし、丸々五年をかけて慎重に準備してきました」と、統括課システム統括グループ企画役補佐の藤代剛志さんは話します。

支店の対応 熊本支店を例に

新しい千円券に描かれる北里柴三郎は、熊本県の出身です。当地では関心が高まっており、熊本支店では店内見学において見本券の紹介を行うなど、広報にも力を入れています。

そうした活動の一方で、やはり苦労しているのは金庫のスペース繰りです。

限られたスペースに新券を備蓄していくため、熊本支店では回収した日本銀行券の鑑査のペースを上げています。

「汚れた紙幣は裁断処分し、きれいなものは再流通させることができるので、鑑査すればその分スペースができるのです。ただ、鑑査を行うためには対応の対応人数が必要になるので、鑑査のペースを上げようとすると窓口業務に負担が生じます。時には、他課から窓口業務に協力してもらったりなど、支店全員の理解のもとで進めています」

と、同店の野村尚美さんは話します。支店の業務では、発行当日の対応も重要です。日本銀行本支店では、受払ブースや駐車場に限りがあるため、事



新しい日本銀行券（見本券）の紹介を行う店内見学の様子



SNS（日本銀行公式 X）による情報発信

SNSなどで海外へも広報

このように準備が進む中、発券局では広報にも力をいれています。本支店や金融機関などでのポスター掲示、パ

前に各金融機関と来店時刻を調整しておき、請求された量の新券を円滑に提供することが求められます。

「地域の金融機関が一堂に会する責任者を開くなどして準備する予定です。金融機関に対して来店希望時刻や受払見込みの調査を実施しており、その結果を踏まえて態勢を固めたいと考えています」

と、同店発券課長の和田明典さんは話します。



英文パンフレットを作成し海外広報も行っている

ンフレット配布、ホームページ等での情報発信などです。

外国人への周知も重視しており、英文パンフレットの作成やSNSによる情報発信なども行っています。

「外国人からは『現行券は使えなくなるの?』というお問い合わせが多くあります。そうした不安や疑問に鑑みて、なるべくかみ砕いた英語表現で情報発

信しています」

と、英訳を担当する発券局総務課国際関係グループの良英里子さんは話します。

キャッシュレス化が進んでいますが、現金へのニーズは依然高いものがあります。

「誰でも、いつでも、どこでも、安心して使える現金は、今後も決済手段として大きな役割を担うものと考えています。国民の皆さまが新券を手にするまでには少し時間を要するかもしれませんが、楽しみにお待ちいただければと思います」

と、改刷グループ企画役の長尾さんは話します。

今回の取材では「二〇年ぶりの改刷に関わることができて光栄」（日本橋発券課運営保管グループ企画役の寺口さん）など、それぞれの職員が誇りと喜びを持って職務に当たっていることが垣間見えました。

なお、現行券は新券発行後も引き続き通用します。「現行券は使えなくなる」といった誤った情報や詐欺行為などにご注意ください。

（肩書などは二〇二四年三月時点の情報をもとに記載）



日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。また、展望レポートの内容を、より幅広い読者に伝えるための取り組みとして、そのポイントをイラストとともに簡潔に整理した資料（ハイライト）を公表しています。本稿では、2024年4月の展望レポート（基本的見解は4月26日、背景説明を含む全文は4月30日公表）のハイライトをご紹介します。

*全文は、日本銀行ホームページに掲載されていますので、ご関心のある方は、ぜひそちらもご参照ください。

<https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm>



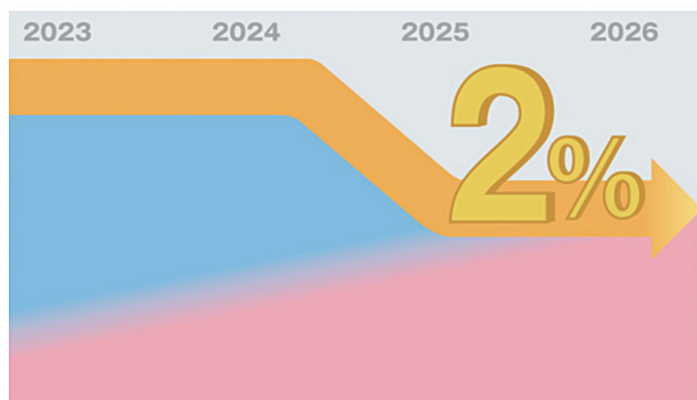
「経済・物価情勢の展望」（展望レポート・ハイライト）

2024年4月



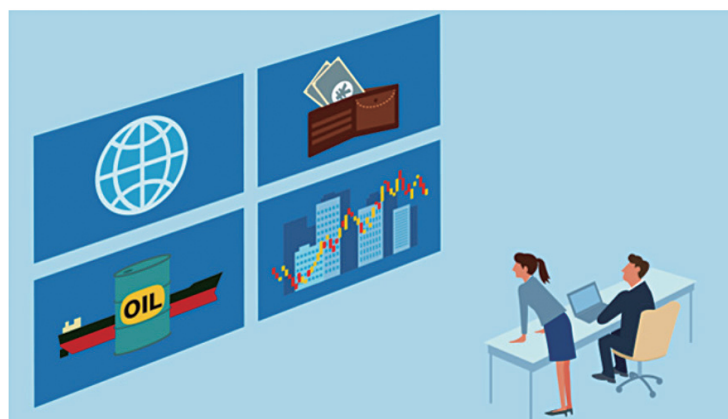
日本経済は成長を続ける
日本経済は、海外経済が緩やかに成長するもとで、金融面からの後押しなどもあって、潜在成長率を上回る成長を続けます。

**物価は来年度以降
二%程度で推移する**
消費者物価の前年比は、今年度には二%台後半となったあと、来年度・再来年度は概ね二%程度で推移します。この間、一時的な変動を取り除いた消費者物価の基調的な上昇率は、徐々に高まったあと、二%の「物価安定の目標」と概ね整合的な水準で推移します。



海外の経済・物価動向、資源価格の動向、企業の賃金・価格設定行動など、日本経済・物価を巡る不確実性は引き続き高い状況です。また、金融・為替市場の動向と日本経済・物価への影響にも十分注意を払う必要があります。

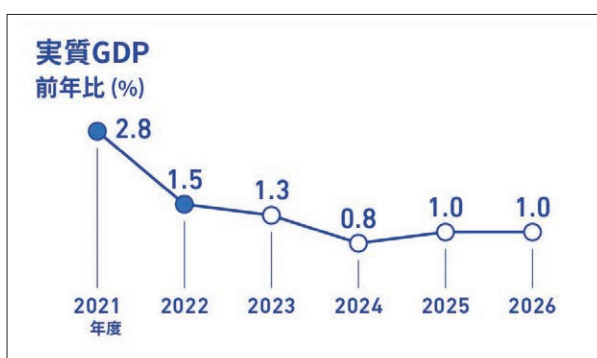
日本経済・物価を巡る不確実性は高い



**2%目標のもとで
金融政策を運営していく**

日本銀行は、2%の「物価安定の目標」のもとで、その持続的・安定的な実現という観点から、経済・物価・金融情勢に応じて適切に金融政策を運営していきます。

政策委員の経済・物価見通し



(注) ●は実績値、○は見通しです。



日本銀行のレポートから

日本銀行は、金融システムの安定性を評価するとともに、安定確保に向けた課題について関係者とのコミュニケーションを深めることを目的として、金融システムレポートを年2回公表しています。本レポートの分析結果は、日本銀行の金融システムの安定確保のための施策立案や、考査・モニタリング等を通じた金融機関への指導・助言に活用しています。また、国際的な規制・監督・脆弱性評価に関する議論にも役立てています。金融政策運営面でも、マクロ的な金融システムの安定性評価を、中長期的な視点も含めた経済・物価動向のリスク評価を行ううえで重要な要素の一つとしています。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。<https://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/index.htm>



「金融システムレポート」

二〇二四年四月

わが国の金融システムは、全体として安定性を維持している。

金融仲介活動は円滑に行われている。貸出市場では、金融機関の融資姿勢は引き続き積極的であり、残高増加が続いている（今年三月の金融政策の枠組み見直し前後の金利動向については「金融システムレポート（二〇二四年四月号）全文」BOX4を参照）。こうした金融仲介活動に、大きな不均衡は認められない（図表1）。

わが国の金融機関は、様々なストレスに耐え得る、充実した資本基盤と安定的な資金調達基盤を有している。ただし、テールリスクへの警戒

は引き続き重要である。世界的な金融引き締め継続とそれに伴う海外経済の減速懸念など、ストレス局面は一段と長引く可能性がある。より長

期的な視点からみると、金融機関の損失吸収力の低下が、金融仲介活動の停滞や、過度な利回り追求など金融仲介活動の過熱につながる可能性がある。これらの観点から以下の潜在的な脆弱性^{ぜいじょせい}に的確に対処し、わが国金融システムの安定性を将来にわたって確保していく必要がある。

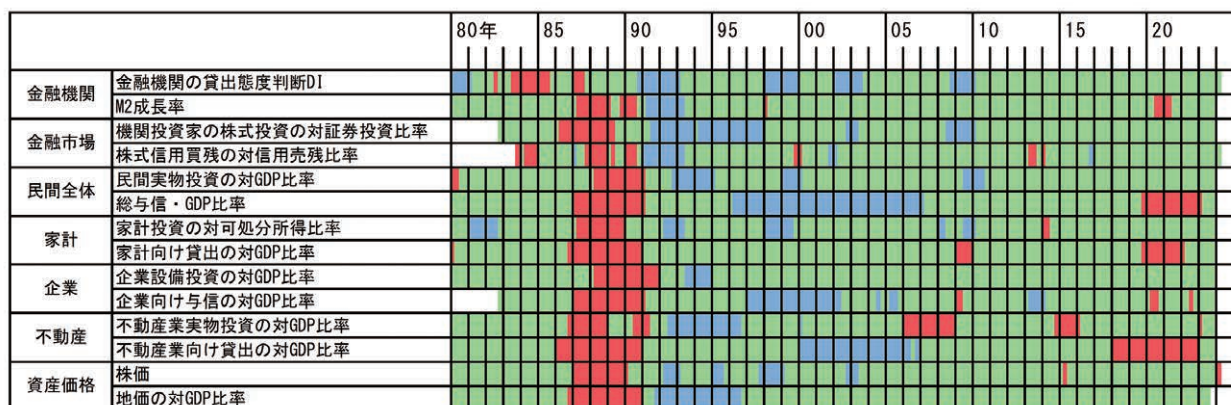
内外の不動産リスクとその影響

わが国の不動産市場では、一部に

割高感が窺われる。都心の商業地区において、局所的に高額の取引が増えている（図表2）。これまでのところ、オフィス空室率の上昇は、幅広い地域で観察される米国とは異なり、都心の一部に限られる。ただし、これまで不動産取得に積極的だった海外投資家が、昨年後半に四年振りの売り越しに転じるなど、変化もみられる（図表3）。

この間、米国では、オフィス向け貸出の延滞率が一段と上昇している。米国をはじめとする海外不動産市場の変調が、世界分散投資を行う海外ファンドを介してわが国不動産市場に及ぼす影響について、今後も

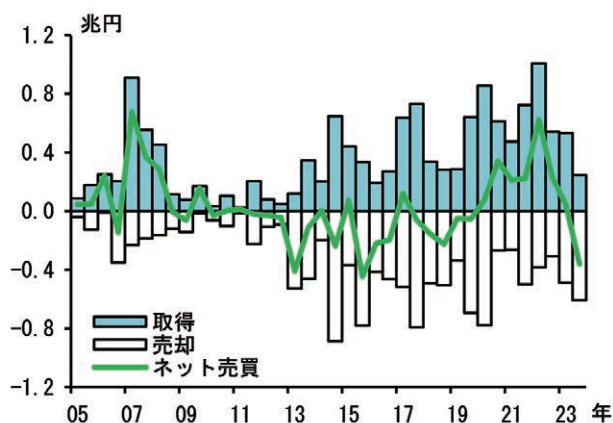
図表 1 ヒートマップ



(注)「金融システムレポート(2024年4月号)全文」図表Ⅲ-3-1 参照。

(資料) Bloomberg、財務省、東京証券取引所、内閣府、日本不動産研究所、日本銀行

図表 3 海外投資家の不動産売買

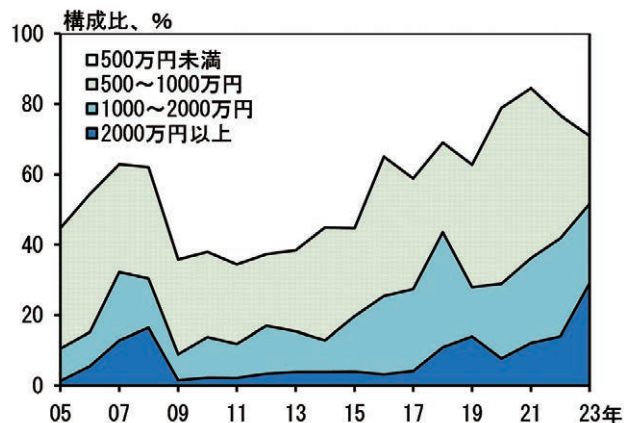


(注)「金融システムレポート(2024年4月号)全文」

図表Ⅲ-3-12 参照。

(資料) 日本不動産研究所

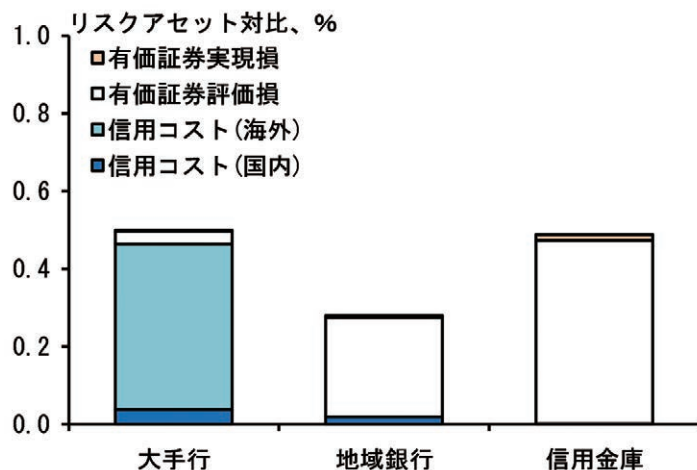
図表 2 都心の取引価格分布



(注) 都心5区の商業地取引価格(坪単価)。「金融システムレポート(2024年4月号)全文」図表Ⅲ-3-11 参照。

(資料) 国土交通省

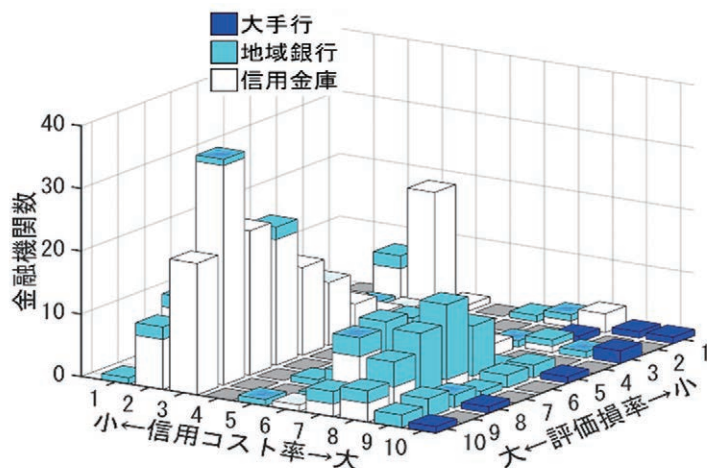
図表 4 不動産ショックの経済損失(発生後1年目)



(注)「金融システムレポート(2024年4月号)全文」図表Ⅶ-2-8 参照。

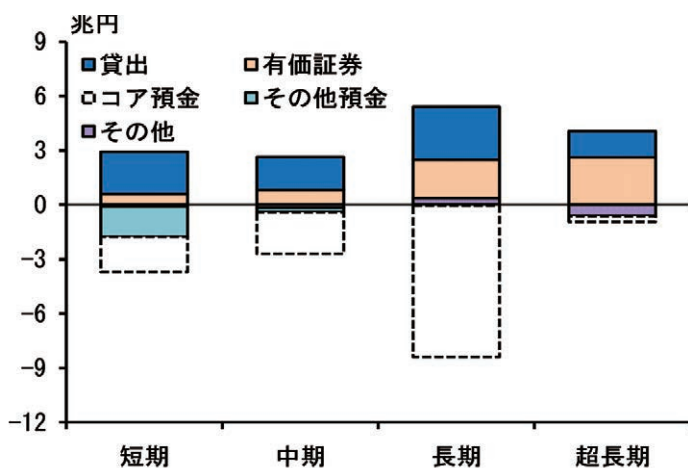
注視する必要がある。こうした問題意識から、今回のマクロ・ストレステストでは、海外市場の調整を契機に、都市圏の商業用不動産価格が局所的に調整するリスクを想定した。テスト結果からは、不動産ショックのもとで発生する金融機関の経済損失(国内外の信用コストと有価証券の評価損・実現損)は、マクロ的に

図表 5 損失タイプ別にみた金融機関の分布



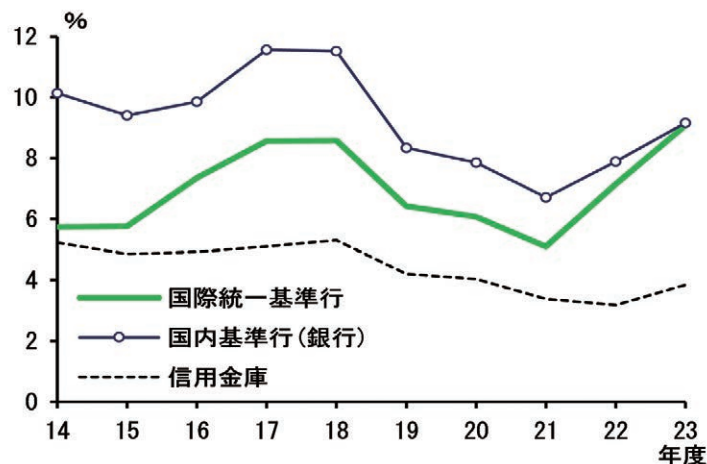
(注)「金融システムレポート(2024年4月号)全文」図表V-2-10参照。

図表 6 金利リスク量



(注)「金融システムレポート(2024年4月号)全文」図表IV-3-1参照。
(資料) 日本銀行

図表 7 経済資本が維持される上限金利



(注) 評価損益算入後の自己資本比率が規制水準に一致する、10年国債金利の試算値。「金融システムレポート(2024年4月号)全文」図表IV-2-7参照。
(資料) 財務省、日本銀行

は限定的であることが確認できる(前ページ図表4)。邦銀による海外不動産ファイナンスは僅少であり、米国市場の大幅な調整を想定しても、追加損失は限られる。

ただし、国内では、金融循環の拡張局面が長期化するなか、金融機関の不動産関連エクスポージャー(貸

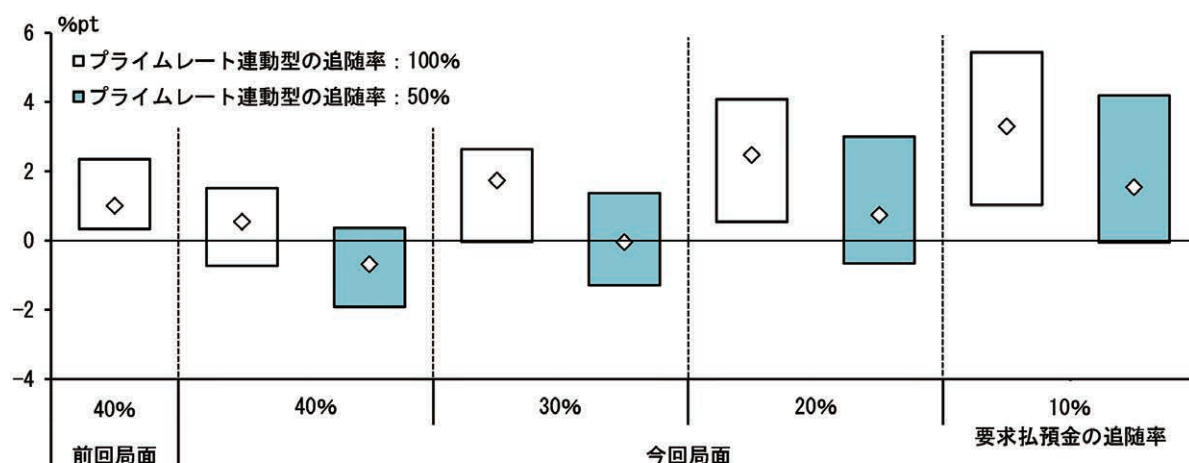
出および有価証券投資)が積み増されている。特に、都市圏の不動産に対する共通エクスポージャーが拡大している。このため、都市圏の商業用不動産市場に限定された局所的なショックであっても、業態を問わず、全国の幅広い金融機関に影響が及び得る(図表5)。

金利上昇に対する 経済主体ごとの耐性

銀行部門の円貸金利リスク量(銀行勘定の一〇〇b p v、コア預金を勘案したベース)をみると、資産サイドと負債サイドのリスク量は概ねバランスした姿となっている(図

表6)。直近にかけては、金利上昇リスクが意識されるなか、有価証券デュレーションが短期化するなど、デュレーション・ギャップ(資産・負債の金利更改期間の差、コア預金を勘案しないベース)が縮小方向にある。こうしたリバランス行動を反映して、金利上昇に対する金融機

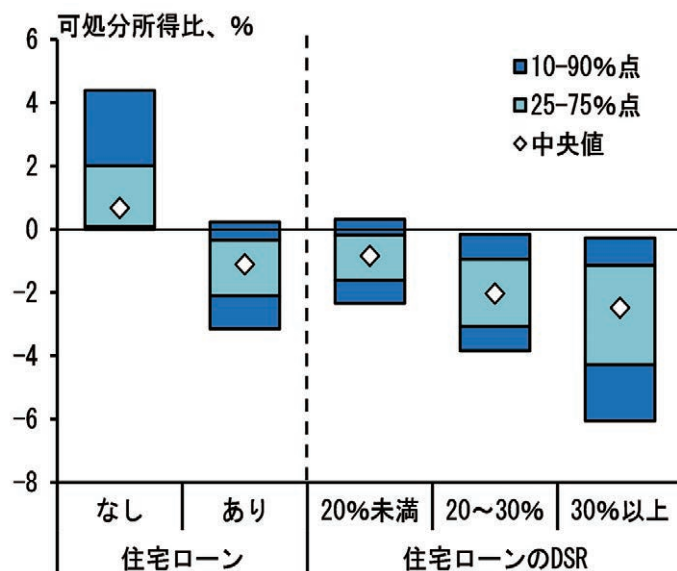
図表 8 シミュレーション結果：利息収支の変化



(注) イールドカーブが+0.1% pt 上昇した際の金融機関当たりの利息収支（対国内資金利益比率）の変化について、中央値（マーカー）と25 - 75%点（バンド）を表示。その他の金利追従率は、プライムレート連動型以外の貸出と有価証券が100%、定期性預金が80%。「前回局面」は2006年度時点、「今回局面」は2023年9月時点。「金融システムレポート（2024年4月号）全文」図表IV-3-7参照。
(資料) 日本銀行

関の耐性は改善傾向にある。図表7は、有価証券の評価損が拡大しても、金融機関が十分な損失吸収力を維持できる一〇年国債の上限金利を試算した結果である。低金利環境下において低下傾向にあった上限金利は、直近にかけて反転している。

図表 9 金利関連収支の変化

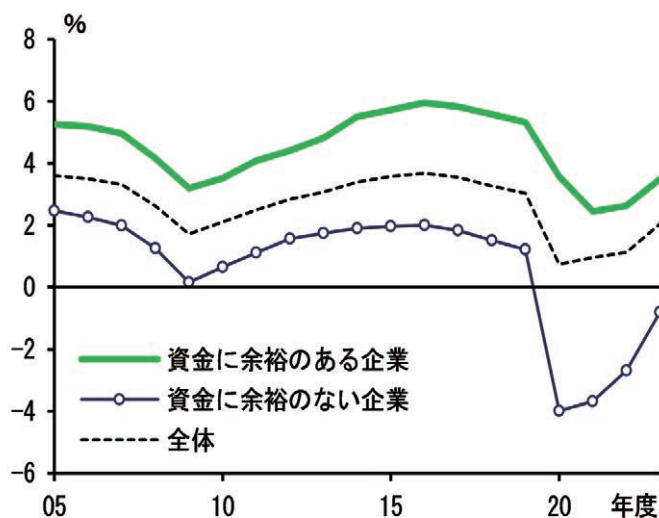


(注) 短期金利が+1% pt 上昇した際の世帯当たり収支変化の分布。「金融システムレポート（2024年4月号）全文」図表Ⅲ-3-20参照。
(資料) 総務省

ただし、市場金利の上昇が金融機関収益に及ぼす影響は、イールドカーブの変化に加え、貸出や預金の金利追従率に依存する（図表8）。追従率は、貸出・預金市場の需給バランスや競争環境、顧客との関係から影響を受ける。バランスシート構成に応じて金融機関収益への影響が異なること、預金の粘性性には不確実性があることにも注意

が必要である。家計部門においては、景気改善とそれまでの金利上昇は、全体として、所得や利息収支の改善につながることが見込まれる。住宅ローン債務者も、激変緩和措置によって短期的な元利返済額の増加が抑制されるほか、預金など保有資産からの利息収入の増加が返済負担を部分的に相殺する（図表9）。企業部門において

図表 10 ICR 1倍割れとなる借入金利



(注) 金利上昇後の ICR が 1 倍となる借入金利の試算値。「資金に余裕のある(余裕のない)企業」は、手元資金が販管費の半年分以上(半年分未満)の企業。「金融システムレポート(2024 年 4 月号)全文」図表 IV-1-5 参照。

(資料) CRD 協会

は、企業収益が改善基調にある。多くの企業は、高い借入金利であっても、利払い負担に耐え得る収益力を確保している(図表10)。ただし、家計・企業とも財務のばらつきが大きい。年収に対する年間返済額比率(DSR)が高い家計や利払い能力(ICR)が低い企業の中には、金利上昇に対する耐性が低い先もある。

その他の注目すべき動き

【企業倒産】経済活動が回復基調にあるも、企業倒産・デフォルトが増加している(図表11)。労働市場がタイト化するなか、人手不足を事由とする倒産もみられる。そうした中でも、金融機関の信用コストは抑制されている。最近の倒産・デフォルトの大半を小規模企業が占

めていることが、その一因である。ただし、最近の信用コストには、いわゆる越境貸出など、同一企業に対して複数の金融機関が貸出を実行している共通エクスポージャーの中から、大口の信用コストを計上する事例が散見される。こうした貸出先からは、金融機関が中間管理のための債務者情報を入手することが難しく、デットガバナンスが働きにくくなっている面がある。金融機関には、こうした情報ギャップを最小化する取り組みが不可欠である。

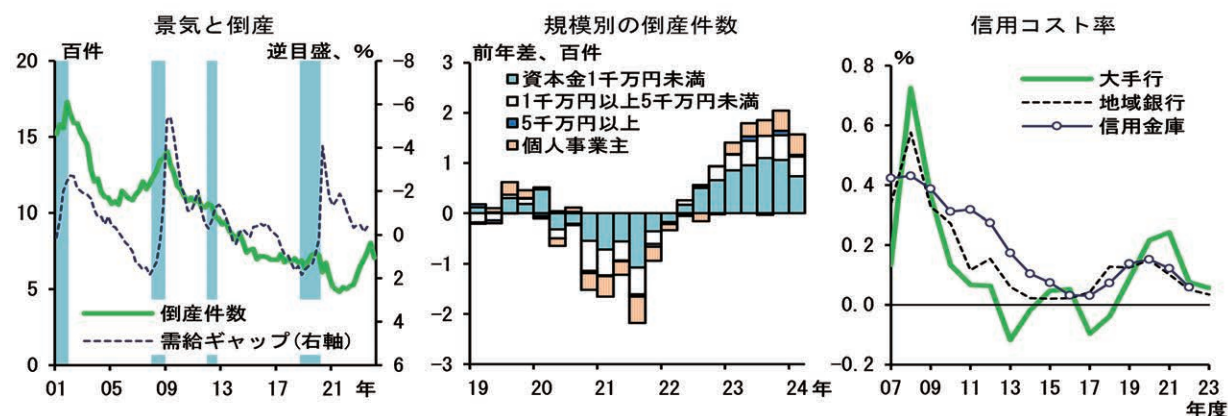
【株価】株価が上昇している。最近の株高には、堅調な企業業績やガバナンス改革に対する市場の期待が反映されている。金融機関にとって、株高は株式リスク量の増加要因となる一方、益出し余力の改善要因にもなっている。この間、上場銀行は、市場評価の改善に向けて増配し、配当性向を引き上げてきた(図表12)。こうした傾向は、収益力など損失吸収力の低い銀行からも観察される。資本政策における収益配分は、資本基盤と収益力を踏まえたものである

ことが望ましい。

【海外のプライベートファンド】海外では、ここ数年、プライベートファンド市場が急成長を遂げている(図表13)。プライベートファンドは、投資家からの投資資金と金融機関からの借入資金をもとに、伝統的な金融仲介を補完・代替する存在となっている。邦銀も、僅かながら、プライベートファンドに対するエクスポージャーを有している。そのプライベートファンド市場は、投資資金の流入増加が頭打ちとなるなど、これまでの成長ペースに変化がみられる。また、ファンドの投資先企業の利払い負担が高まるなど、ファンドやファンドに融資する金融機関が負う信用リスクは高まりつつある。

日本銀行は、考査・モニタリング等を通じて、これらの潜在的な脆弱性に対する金融機関の取り組みを促していく。また、マクロプルーデンスの視点から、金融機関による多様なリスクテイクが金融システムに及ぼす影響について引き続き注視していく。

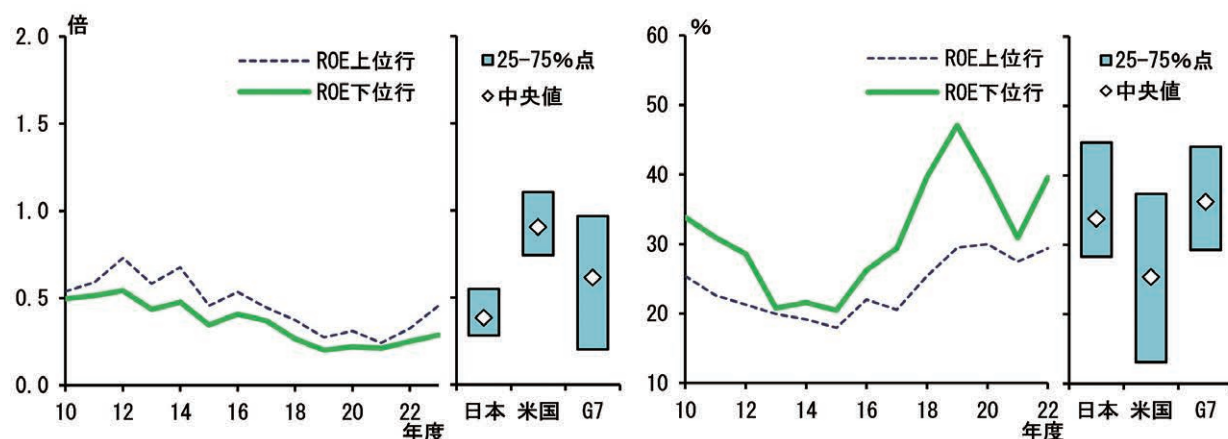
図表 11 倒産件数と信用コスト率



(注) 左図のシャドーは景気後退局面。「金融システムレポート (2024 年 4 月号) 全文」図表Ⅳ-1-3、Ⅳ-1-6 参照。

(資料) 帝国データバンク、東京商工リサーチ、日本銀行

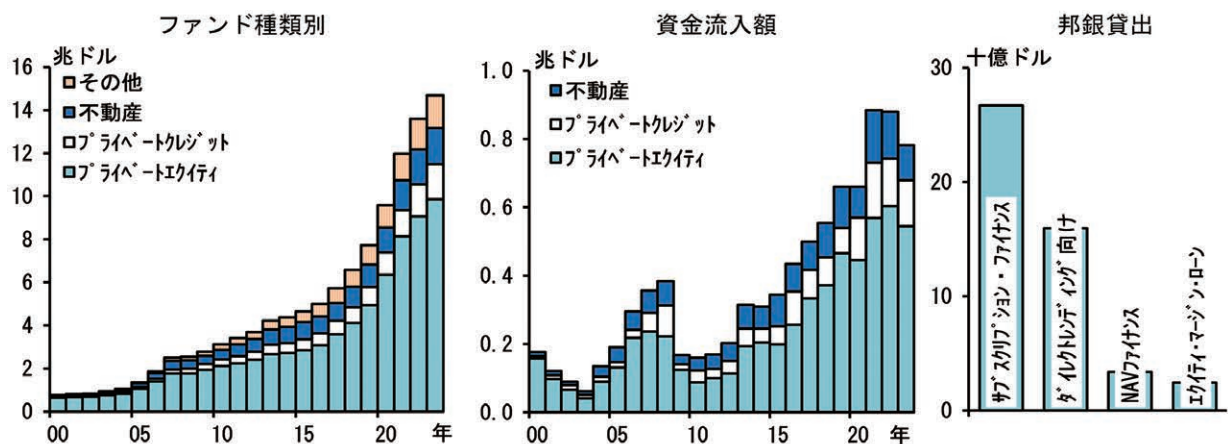
図表 12 上場銀行の PBR (左) と配当性向 (右)



(注) 「G7」は日本と米国を除く。「金融システムレポート (2024 年 4 月号) 全文」図表Ⅴ-1-7 参照。

(資料) S&P Global Market Intelligence

図表 13 プライベートファンド市場



(注) 集計対象は、左図が全世界、中図が米州。右図は 3 メガ行の米州ファンド向け貸出残高。「金融システムレポート (2024 年 4 月号) 全文」図表 B3-1、B3-2 参照。

(資料) Preqin、日本銀行

新千円券肖像・北里柴三郎の出身地からのレポート（熊本支店）

▼新千円券の肖像に採用された北里柴三郎は、熊本県阿蘇郡小国町の出身です。昨年、生誕一七〇周年を迎えました。新券の「顔」になったことで、県民の柴三郎への関心が一層高まり、各種イベントで盛り上がりつつあります。

▼例えば、小国町の北里柴三郎記念館では、昨年九月にシアターホールがグランドオープンしたこともあり、来場者数が増加傾向にあります。また、柴三郎ゆかりの熊本大学医学部などによる顕彰事業として、講演会やセミナーも開催されています。このほか、地元企業が関連グッズを新たに販売する動きもみられます。

▼こうした中、熊本支店では、支店長がイベントに参加したり、支店見学の展示物として新千円券の顔出しパネルを新設するなど、柴三郎に関する広報の強化にも取り組んでいます。「郷土の偉人 北里柴三郎」と



熊本支店見学展示物

記した看板は、当店職員の手作りで、文字の部分には銀行券の裁断片を施しています。支店見学の案内は、熊本支店のホームページをご覧ください。

第一四回 南海地震金融対策連絡会議を開催（高知支店）

▼三月二十九日、高知支店および財務省四国財務局高知財務事務所は、二八の県内所在金融機関および防災関係者に参加いただき、標記会合を五年半ぶりに開催しました。

▼標記会合は、南海トラフ地震発生時に金融面の円滑化を図るよう相互に連携を強化すること等を目的に、二〇〇三年から継続的に開催しており、今回が一四回目となります。

▼今回の会合では、高知県南海トラフ地震対策課、日本銀行高知支店、高知財務事務所が、最新の南海トラフ地震発生時の

被災想定や業務継続体制強化の取り組み等について説明した上で、参加者間で意見交換を行いました。

▼今後も、引き続き関係者間で連携を深めながら、県内金融関係者の業務継続体制の強化や被災時の金融面の円滑化に努めてまいります。

▼本会合の議事は、高知支店のホームページをご覧ください。

「短観」は二〇〇回目の調査を迎えました

▼一九七四年に始まった「短観（全国企業短期経済観測調査）」は、二〇二四年三月調査をもって、二〇〇回目を迎えました。

▼短観は、全国の企業動向を的確に把握し、金融政策の適切な運営に資することを目的とした統計調査です。企業が自社の業況や経済環境の現状・先行きについてどうみているか、といった項目に加え、売上高や収益設備投資額といった事業計画の実績・予測値など、企業活動全般にわたる項目について、四半期（三、六、九、十二月）ごとに調査を行っています。調査対象企

業は、中小企業が約半数を占めるなど全国の幅広い企業としており、その数は約一万社を数えますが、毎回ほとんどの企業にご回答いただいております（三月調査の回答率は九九％）。これまでの間、調査対象企業の皆さまにおかれましては、ご協力をたまわり、厚く御礼申し上げます。

▼調査開始以来五〇年の年月の中で、経済構造の変化や回答のご負担を勘案しながら、調査項目の改廃や業種分類の見直しのほか、現在では約七五％の調査対象企業にご利用いただいているオンライン回答の導入など、時代に合わせた変化を進めてきました。

▼「短観」を次の五〇年にも続けていくために、これからも不

「全国企業短期経済観測調査」（短観）調査表—日本銀行

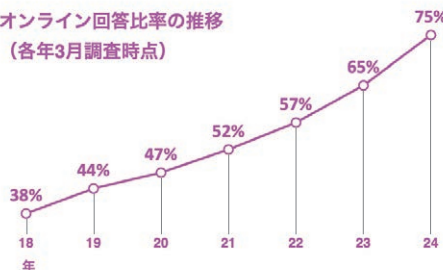
・本調査は「統計法」（平成19年法律第53号）に基づいて、日本銀行が行う統計調査です。
・同法第34条第1項の規定により、ご回答内容については、その秘密を保護します。
・同法第40条第1項の規定により、ご回答内容については、同法に特別の定めがある場合を除いて、統計調査の目的以外に使用することはありません。

調査期	調査年	調査月	企業番号	業種番号	連絡先	会社	店	開業	得意	得意
200	2024	3								

1. 判断項目

調査項目	回答区分	コード番号	最近	先行き
(1) 貴社の業況	1. 好い 2. 好くない	601		
(2) 貴社界の業況	1. 好い 2. 好くない	602		

オンライン回答比率の推移 （各年3月調査時点）



断の見直しに努めてまいりますので、引き続き調査へのご理解・ご協力をお願いいたします。

▼調査結果は、日本銀行ホームページをご覧ください。



国際コンファランスを開催

▼一九八三年以来、日本銀行は、金融研究所において国内外の著名な経済学者や中央銀行関係者を招いた国際コンファランスを開催しています。今年は、多角的レビューの一環として、「Price Dynamics and Monetary Policy Challenges—Lessons Learned and Going Forward—」（物価変動と金融政策の課題—教訓と展望—）をテーマとして、五月二十七日、二十八日に開催しました。



開会挨拶を行う植田和男総裁
(撮影：野瀬勝一)

▼植田和男総裁の開会挨拶、スタンフォード大学のジョン・テ

イラー教授による前川講演（金融研究所発足時（一九八二年）の前川春雄総裁の名を冠したスピーチ）、内田眞一副総裁、プリンストン大学のマーカス・ブネルマイヤー教授による基調講演に続き、物価変動や伝統的・非伝統的金融政策の効果に関する研究発表・パネル討議が行われ、中央銀行がこれまで得た教訓と今後の展望について議論が展開されました。

「ISOパネル（第八回）：金融取引におけるISO 20022の導入と将来の決済取引」を開催

▼決済機構局では、二月二十七日に標記パネルディスカッションをオンライン形式で開催しました。

▼ISO 20022は、金融取引の情報伝送に用いる電文フォーマットのルールや手続きを定めた国際標準規格です。世界中の主要な決済システムで導入が進められており、銀行間の国際送金に用いられるSWIFTという通信ネットワークでは、二〇二三年三月よりISO

20022採用に向けた対応が始まりました。今後、世界中で電文の標準化が進めば、事務リスク軽減や事務処理速度の向上が期待でき、クロスボーダー送金を含む金融取引の改善や効率化につながると考えられます。

▼当日は、ISO 20022規格の概要、メッセージの仕組みと進捗中の規格改定で新たに創設されるパートや、国際的な導入状況とクロスボーダー送金市場の構造変化への対応について解説しました。その上で、規格策定に参画されている専門家や金融ビジネスの第一線で活躍されている実務家の方々と、証券といった金融取引におけるISO 20022の導入が将来の決済取引にどのような影響をもたらすか、についてパネルディスカッション形式で議論しました。

▼決済機構局では、金融サービス分野の国際標準化を検討する国際標準化機構・金融サービス専門委員会（TC 68）の国内委員会事務局を務めています。金融サービス分野の標準化に関心のある方は、日本銀行



ホームページをご覧ください。

「決済の未来フォーラム クロスボーダー送金分科会（第六回）」を開催

▼決済機構局では、二〇二三年十二月十一日に標記会合を開催しました。

▼会合では、これまでの分科会と同様、クロスボーダー送金の改善に向けた取り組みとして、①クロスボーダー送金改善の優先取組分野を含むロードマップとKPI報告書、②ISO 20022の仕様にかかる共通要件に関する報告書といったグローバルな作業の進捗状況が紹介され、議論が交わされたほか、③AML/CFT（注）の取り組みが紹介されました。

▼①では、まず、金融安定理事会（FSB）の「クロスボーダー送金の目標達成に向けた年次進捗報告書」・2023年KPI報告書」で示された進捗状況が主に説明されました。参加者からは、規制対応や商慣習が送金のスピード改善の阻害要因となっているといった声や、ISO 20022の採用によるSTP

編集後記

■今号発刊の翌週7月3日に、いよいよ新しい日本銀行券の発行が開始されます。

■「対談」では、新五千円券の顔となる津田梅子の生涯について、津田塾大学の高橋学長に内田副総裁がお話を伺っています。日本初の女子留学生、津田塾大学の前身となる私塾の創立者といった良く知られている面だけでなく、内外の協力者から資金を集める起業家としての側面、女子教育に込めた思いなど、もっともっと梅子の生涯を知りたくなる内容となっています。

■また、「エッセイ」には新一万円券の顔となる渋沢栄一の玄孫である渋澤健さんに寄稿していただいたほか、「トピックス」として、新千円券の顔となる北里柴三郎の出身地、熊本からのレポートも掲載しています。このほか、「FOCUS BOJ」では、新しい日本銀行券の発行に向けて、これまで日本銀行が行ってきたさまざまな準備や取り組みを紹介しています。

■皆さんが新しい日本銀行券を手にした際、その背後にあるストーリーに思いをはせるお役に立てば、嬉しく思います。(小牧)

[アンケート募集中]

「にちぎん」に関するご意見・ご感想は、アンケートよりお寄せください。日本銀行のホームページからインターネットでもアンケートにご回答いただけます。



※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDF ファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。(https://www.boj.or.jp/about/koho_nichigin/index.htm)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ(https://www.boj.or.jp)をご覧ください。

にちぎん 2024 年夏号
編集・発行人 小牧義弘
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
☎ 03-3277-1609



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 株式会社アイネット
禁無断転載

(Straight Through Processing)化を通じて規制対応の効率化を図ることが重要であるといった声が聞かれました。また、個別行の取り組みとして、マニュアル作業の発生する異例事務の削減などが紹介されました。

▼②では、ISO 20022の採用における調和に向けた取り組みについて、二〇二三年、市中協議を経て最終化された報告書の内容が説明されました。参加者からは、報告書で示された共通要件は、新たなシステム開発を伴う見通しであることから、共通要件の適用方法や本邦

における必要性などを見極めながら進めるべきといった声が聞かれました。

▼③では、AML/CFTに関する金融活動作業部会(FATF)傘下の下部会合での最近の議論、FATF第四次対日相互審査フォローアップ結果や国内対応、改正資金決済法のもと新設された為替取引分析業の許可審査などが紹介されました。参加者からは、AML/CFTの実効性向上や業務の効率化・高度化の観点から、本邦規制上で確認義務のある項目を、グローバルな市場慣行として必須項目

とすること、各事業者が自身のビジネスリスクを踏まえて対応することの重要性が指摘されました。

▼本会合の議事概要は、日本銀行ホームページをご覧ください。(注 マネーロンダリングおよびテロ資金供与対策などを指す。)

第二四回情報セキュリティシンポジウムをオンライン開催

▼金融研究所情報技術研究センター(CITECS)は、二月十五日、「データ活用とプライバシー



シー保護の両立」をテーマとするシンポジウムを開催しました。

▼近年、多くの組織が、戦略的にデータ活用を推進していますが、その際には、プライバシーへの配慮が必要となります。今回のシンポジウムでは、専門家の方々から、プライバシー保護について、技術と制度の両面から解説いただくとともに、利用に当たっての留意点などについてディスカッションを行いました。

▼当日の議論の模様や講演資料は、日本銀行金融研究所ホームページをご覧ください。





ブリュッセルの有名な観光スポット グラン・プラス

複雑な小国・ベルギー

欧州の「南北問題」と聞くと多くの人は豊かな北欧と南欧の対立構図を思い浮かべるかもしれませんが、でも実はこの人口約1,170万人の小さな国ベルギーにも「南北問題」は存在します。ベルギーの言語分布は「フランダースの犬」の舞台として有名な北部フランドレン地域がオランダ語圏、南部ワロン地域がフランス語圏で、ドイツとの国境付近に小さなドイツ語圏が存在します。北部は南部に比べて裕福であり、なぜ裕福な自分たちが南部を支えなければならないのかという不満から、北部の独立を主張する人々も存在します。

EU（欧州連合）の本部や私が勤務するJCIF（国際金融情報センター）の事務所がある首都ブリュッセルでもそうした「南北問題」を感じる機会があります。地理的には北部に位置するブリュッセルですが、実際に中心地を歩いていて耳にするのはほとんどがフランス語です。道路標識や公共交通機関の表示はフランス語とオランダ語を併記していますが、商業施

設やスーパーでの店員さんの声掛けはフランス語以外を聞いたことはありません。そしてこちらがフランス語がわからないようだ、と悟った店員さんが次に話す言語は英語。オランダ語ではありません。

北部出身のこちらの知人の不満の一つは「首都に住むベルギー人の多くが、外国語である英語は理解できてもオランダ語を理解できない」ということです。「私は自分の国で母国語を話そうとしているだけなのに」という彼女の嘆きを聞く度に、こうした言語・文化的に不利益を被っているという意識が「南北問題」の不満の背景にあるのかもしれない、と想像します。

今年は総選挙が実施される年であり、当事務所としても各政党の主張や世論を調査していく方針ですが、個人的にもこの国の歴史・文化に対する理解をもっと深めていきたいと思っています。

（国際金融情報センター、ブリュッセル）

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



ブリュッセル中央駅にてオランダ語とフランス語が併記された案内板



にちぎん